

神奈川縣教育

昭和七年四月十八日發行

第二百八十四號

教育會
18/17

口繪	新學務部長——郷土資料研究協議會	栗原政男
卷頭語	新舊學務部長送迎の辭	市川正夫
	新任の御挨拶	加藤正夫
	昭和日本の使命について	藤正夫
	文部省高等小學唱歌解説	岩本岩次郎
	書道史上より考察したる草假名につきて	岩本岩次郎
我が縣の自然地理	飯田義治	岩本岩次郎
平塚市の地理學的考察	中丸壽郎	岩本岩次郎
讀方教育の檢討(其の三)	杉山敏美	岩本岩次郎
兒童の短歌俳句短評	杉山敏美	岩本岩次郎
綴方の生活內容の指導に就いての一考察	小松和夫	岩本岩次郎
綴方教育私見	飯田義治	岩本岩次郎
詩文的綜合的指導論	市川正夫	岩本岩次郎
低學年體操科指導上の諸問題と教材遊戲化の實際(其の三)	加藤正夫	岩本岩次郎
異常兒取扱の實例	栗原政男	岩本岩次郎
郷土講座「清算生糸」	市川正夫	岩本岩次郎
想華(短歌—俳句—俳句會)	加藤正夫	岩本岩次郎
關西詩行脚(續)	藤正夫	岩本岩次郎
教育援助を看板とするインテリ有志を徴らせ	岩本岩次郎	岩本岩次郎
彙報(郷土研究會狀況—其他)	岩本岩次郎	岩本岩次郎

神奈川縣教育會

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak

東京音樂學校内 日本教育音樂協會編纂

新尋常小學唱歌

第一學年用
第二學年用
第三學年用
第四學年用
第五學年用
第六學年用

定價各冊金拾貳錢
送料各二錢
新省令に適合した
唯一の唱歌集!!

文部省

檢定済

昭和七年二月十四日



新時代の兒童生活に即したる新しい唱歌集！
作歌作曲には現代一流大家の全部を網羅！
各卷全十五曲何れも特別委員會の一粒選り！
新鮮にして重厚教育的にして然も藝術的！

新尋常小學唱歌伴奏及解説

第一學年用
第二學年用
第三學年用

既刊

第四學年用
第五學年用
第六學年用

定價各冊金六拾錢

送料各六錢

エホンシヤウカ ハルノマキ

定價
金參拾五錢
送料貳錢

(新幼稚園唱歌)

東京市神田區仲猿樂町三〇番地

發賣所

音樂教育書出版協會

電話九段(33)二一八七・三一八九一
番
振替東京六四七七〇番

郷土教育研究協議會

- 一、期 日 昭和七年六月三日(金)ヨリ五日(日)マデ三日間
- 二、場 所 神奈川縣女子師範學校附屬小學校
- 三、日 程 左ノ如シ

時 日	時 限	行 事	備 考
三 日 (金)	自午前九時至同十一時 自同十一時至同十二時 自午後一時至同四時	研 究 協 議 教土教育展覽會觀覽 研 究 協 議	各學年教室ニテ學年主任説明
四 日 (土)	自午前九時至同十時 自同十時至同十二時 自午後一時至同二時 自同二時至同三時	實 地 授 業 研 究 協 議 會 研 究 發 表 會 質 疑 及 座 談 會	講堂ニテ行フ 指導講師ハ目下日田權一先生ニ 交渉中
五 日 (日)	自午前九時至同十時 自午前十時至同十二時半 自午後十二時半	郷土教育ノ經過報告 郷土教育ニ關スル講演 見 學	本校及ビ附屬 目下郷土科學主幹尾高豐作先生 ニ交渉中 汽船ニテ横濱港内及鶴見川崎埠
同午後二時半		散 會	

四、研究協議議題左ノ如シ

第一、郷土教育實施上苦心シタル點如何

- 1 資料蒐集上
- 2 郷土室經營上
- 3 郷土意識調査上
- 4 其ノ他

第二、一般教科ノ郷土化ノ實際ニツイテ

第三、郷土ノ教材化ノ實際ニツイテ

五、備 考

本會ハ各都市ヨリ申込マレタル會員五十名ニテ研究協議ヲナス。
其ノ他ノ參會者ハ傍聽參觀者トス(會員ノ申込方法ハ追テ發表ス)

昭和七年四月十八日

神奈川縣女子師範學校
附屬小學校

郷土教育 産業教育
懸賞論文號

本會、昨年、郷土教育、産業教育に關する二大懸賞論文を募り、その中審査
入選せる六大雄篇を輯めて爰に文集とせり。
篤學なる青年教育學者等の雄渾なる文を通してその剴切博大の知見と、眞摯
多年の經驗とにきかば、必ずや吾人を啓發して與へらるゝ所、益多かるべき
を信ず、

希望の方には申込まれ次第頒布す。

一部送料共三拾四錢

神奈川縣教育會

教 育 素 描 パ フ ィ ン ト 第 一 輯

醫 學 博 士 栃 原 勇 指 導
 安藤研究所長 中海軍中佐 安藤謚次郎指導
 田島小學校々醫 官崎春雄指導
 田島小學校 校 研 究 部 調 査

學 業 知 能 ト 身 體 ト ノ 相 關 研 究

○所謂優等兒劣等兒とは何か。身體の如何が學業知能に如何なる影響を及ぼすか。本書は童心身相關研究書の蒿天也
 ○本書は本縣教務課の着眼によりて、研究を囑託せられたる報告書也
 ○教育素描同人は價值ある本書を座右に備ふべく之が印行を引受けた
 り、殘餘を一般に實費を以て提供す。

體 頒 申
 載 價 込

美 術 單 式 印 刷 菊 版 二 十 頁
 實 費 金 十 五 錢 (郵 稅 六 錢)
 橫 濱 市 女 子 師 範 附 屬 稻 木 時 次 郎 宛
 川 崎 市 旭 町 小 學 校 鈴 木 憲 宛



外山新學務部長

福德圓滿、瀟洒落々たる風神は、内に淨智、純情を深く包藏し、識は歐米の文化に徹見し、行は淡々乎として物に凝滯せず、その人爲や誠に君子也。

この人哉、縣教育の樞機に立つ、乃ち政道は明朗潤澤に、文教は清純脩態に、衆黎欣々、齊しく仰きみることを得ん乎。

卷 頭 語

一、鳩山新文相が、劈頭全國小學校長の過半を奏任に待遇すべく既にその成案を果たし、閣議の上程をふるやにさく、眞に賢明なる一大英斷として、昭和 교육の一慶事と稱すべきである。

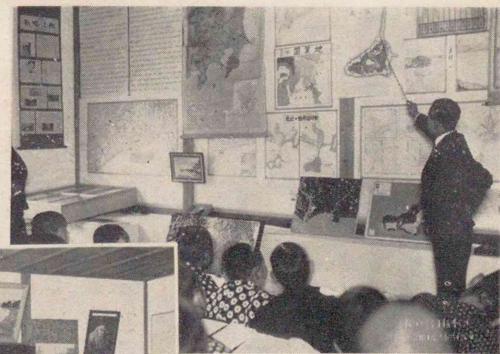
二、在職貳拾有餘年にして微く勳八等に叙せらる、由來、教師は名利に恬淡なるべき者とはいへ、鐵血ビスマークの箴言を金科玉條とするからに、此は又「木のはしくれ」ほどに、過去半世紀は何たるみぢめな待遇なりしぞ、この意味に於いて、文相の明識は、當に時相をうがちえたものと謂ふべきである。

三、然し乍ら、往昔、清女は「思はん子を法師になしたらんこそ心苦しけれ」と、法師になりて僧正僧都の虚名に得意がるが、却つてみ佛の教へにたかへるよと皮肉り、「いとたのもしきわざを、たゞ、木のはしのやうに思へるこそ、いとほしけれ」と難した。

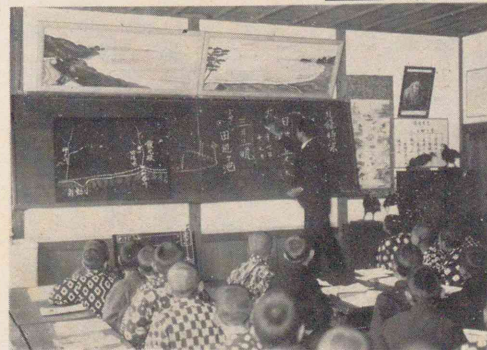
この一女性の見識を今にしては、よもそも時世おくれのことばしせざりしならむ。



録倉郡修正校郷土教育研究會盛況



尋三材題(七里濱)研究



高題一材(江之島)研究

四、昔から天爵をもつて自任せし教育者は、位階勳等を拜辭せるやにきく原敬あるを知り、襲爵を辭める板垣伯ある知れり、まして時勢の進運は人爵以上に、實人間の人格、徳操、技量の崇大を確認すべく、世をあげて民本化されつゝあるをや、惜しむらくは、時、既におそし、こは固より文相の知る所にあらず。

五、現代の教育者は恐らく樂欲はもとより、利欲も、名欲も顧みはしまい、唯安住しやすき生活の天地に、何者にも教育の權威を瀆さるゝことなく、神聖なる教壇に、所信の理想の斷行されうべきをのみ一大念願とするに過ぎない。

六、文相の優遇案大いに可なるも、幸か不幸か、自覺せる眞の教育者は、業に、より一層時代を達觀してゐる。若夫れこれによつて教員の地位が確保さるゝとならば、單に一局部に止めず、一般訓導に及ぼすを當然とせん。

俸給、年數、功績のみによりて人選し、謹嚴な人格を逸することあらば、千歲噬臍の悔をのこさむ乎。何となれば事功は末なり、人格は本なり、人心は事功に渴仰せずして、人格に隨喜するからである。

(Y S 生)

新舊學務部長送迎の辭

田島學務部長殿には今回富山縣内務部長に御榮轉になりました、爰にお別れ申上げることになりました。部長は舊臘御着任になりました以來、僅かに三ヶ月信に短時日でありましたが、教育會長として教員互助會長としての御指導は吾等を啓發された功績尠なくありませんでした、此に厚く御禮を申上ぐる次第であります。

今次の御榮轉につきましては一面甚だ惜別の情に禁へないのでありますか、一樹の蔭に宿り一河の流を汲むも他生の縁と申せば今後さきながく御高誼を賜はらんことを偏へに御願ひいたします。

時恰も陽春の季節とは申ながら、折角御自愛につとめられて邦家のため益々御盡瘁あらんことを祈り併せて將來の御發展を祝福いたす次第であります。

新學務部長外山福男殿には御縁をもつて、今回本縣に御迎へ致しましたことは眞に欣躍禁じ得ない所であります。仄に聞く處によりますれば部長には學徳共に秀で夙に歐米を視察せられ庶般の文物制度に通曉せらるゝとのこと吾等の部長として彌々崇敬の念やみがたきを感じる次第であります。

吾等は田島名部長を失ひ尠ならず失望落魄を感じましたが、新部長殿の圓満馥郁たる其の丰容と玲瓏玉の如き才氣に接しました時、譬へば高樓仙閣山雨將に到らんとして冷氣堂に滿つの感がいたしました。今後部長の智徳を縦横に煥發されて必ずや本縣教育に新生命を與へられることと信じます。

冀くば魯鈍なる吾等に御鞭撻を加へられ時代の歸趨をあやまることなきやう御指導下さいませ。
以上燕辭をつらねて送迎の辭と致します。(Y S 生)

新任の御挨拶

神奈川縣學務部長 外 山 福 男

此度私は本縣の學務部長を拜命致しまして、只管責任の重大なることを感ずるものであります。淺學菲才にして經驗も乏しい私は、唯々誠心誠意を以て、先輩有志の御後援御鞭撻に依て、此重大なる職務を遂行して行きたいと思ひます。

惟ふに教育界には、種々なる改革意見が表はれ、救護法、労働者災害扶助法等重大な社會立法の實施期と爲り、更に日支事變に關する出征將士並遺家族の慰問救護も差當つて必要であり、相當多忙のことと思ひます、

更に本縣の事情から稽へても、或は貿易港として内外人の出入頻繁であり、縣下産業亦錯綜し、帝都東京の門戸であり、色々な意味に於て本縣特別の事情があると思ひますので、私共は極力此等の特別事情に適應した施設努力をしなければならぬと思ひます。

着任早々私の所管事務に關して何等豫備知識を有しませぬが、成るだけ縣下の視察を遂げ、實地に即した最善の施設を行ひたいと存じます。冀くば大方の御指導御鞭撻に依て、重大なる責任を果たしと存じます。一言所懷を述べて新任の御挨拶と致します。

(昭和七年四月十四日)



昭和日本の使命について

瀧 澤 曲 南

時は今春色飄飄、風雪沍寒の冬は全く其名残を留めず、天地一新、到る所櫻花爛漫の好時節となつた。會員各位は舊學年末の要務に當り、兒童學生の現在及將來の爲め必要なる指導と處理とを終へ、是から新學年の輝かしい幕が開かれ希望に充ち満ちた春となつたのである。更らにお芽出度の事には滿洲にも春が來た。滿洲の春は過去二十數年の長い冬籠りから踏破躍進した春で、所謂黎明滿洲と云はふか滿洲新建國と云はふか、兎に角史上に名高い愛親覺羅の天下が再び展開され、併かも其產婆役が日本人であり、日本の生命線の延長であり擴大であるといふ事になつては、何と素晴らしい春として大々的に慶祝せねばならない次第ではありませんか。

此の如く天の時もよく、地の利もあり、人の和も得た所謂三拍子揃つた春陽の好機に當り、一層強く一層深く教育者としての指導精神を呼號し徹底せしむる必要があると信ずる。現代の缺陷多きが中にも、中心問題として社會邦家の爲めに奉仕奉公する熱烈なる情操を育成し啓蒙する様に努力致したいと思ふ。今の學生が知力に於て體力に於て徳操に於て著しい進歩を見せて居る事は慥かであるが、其理想とか抱負に至つては極めて低劣で、多くは立身利己と興家との範圍を出づるものは尠なく、社會國家の幸福を念とし、世界的に又國際的に着眼して高所より大局を達觀し、身を挺して義勇奉公する人の減滅しつつあるは洵に浩歎に堪へざる次第である。學生己に然り、從つて學業を終へて社會に活動する人々、舉世洵々として風をなし立身興家を知るも報國を知らず、職業的に墮し利己を圖るに敏なるも、世の爲め人の爲めに忠なるもの奉公の念に燃ゆるもの尠き現代の五濁惡世を出現した譯である。自分は特に此際に當り國民をして常に遠大なる理想と抱負とを持たしむる事を指導精神の根本義として進まん事を疾呼する所以である。

自分は昭和二年の劈頭「日本及日本人」誌上に昭和維新と教育と題し、大に日本人の覺醒すべき所以を呼號した事がある。其中の一節を抜萃する。

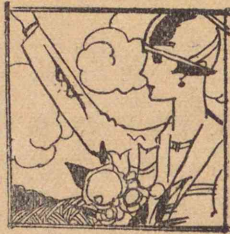
昭和の維新も固より各般の革新と勃興とを伴ふべきは勿論であるが、主として思想と精神の復古に起り、皇道の世界化を招來するにありと言はねばならぬ。即ち東方君子國の感化と善導とにより、北米合衆國にも其非を悟つて國際聯盟に加入せしめ、眞に世界の平和を齎す事にありと言はざるを得ない。

我々日本國民は今や大理想大豫言を構成すべき一大時機に直面し、これを實現すべき一大時運に逢着して居る。此大理想大豫言の内容は昭和の元號と昭和の勅語とに含蓄せられたる深遠雄大の意義に透徹すべきは言ふまでもない。殊に叙聖文武なる 今上陛下を中心と仰ぎ奉り、八千萬日本民族の一致協力に俟ち、内は建國の大精神を作興し、外は皇道國威の世界化を實現すべく、舉國一致して精進し努力し勇往し邁進すべきである。

皇道の世界化、如何にも遠大な好個の理想であり抱負ではないか、滿洲新國家の建設は實に皇道世界化の如實な手始めではないか、今後の育成と補導とが容易ならざる重任ではあるが、其方法宜しきを得ば其將來には實に至重至大な世界的大偉業の實現が含まれる。即ちそれを小にして日本青年の大々的活動の好個なる大舞臺たるは申すに及ばず、延いては支那四百餘州にも好感化好影響を及ぼし、内亂連續劇の中華民國、掠奪不規律不安不信の中華民國をして、規律あり統一あり理想あり道德ある立派な國家たらしむることも、必ずしも至難ではあるまい。斯くて眞に日支の協力提携が出来る様になれば、獨り四億萬民族の大幸福に留らない。東亞二大強國の出現によりて東洋の平和を確保する事も出来、歐米の不逞を匡し歐米の缺陷を濟ひ、茲に世界的平和を將來する基礎となる次第ではあるまいか。

今や滿洲建國といひ上海事變といひ、事局極はめて重大である。此重大なる事局の產物として『昭和日本の使命』（社會教育協會發行價十五錢）と題する荒木陸相の名著が世に紹介された。一讀實に快哉を叫ばざるを得ない。右は前項述べ來つた日本の理想と抱負とを一層精しく一層強く熱説されたもので、國民全部必讀すべき良書である。殊に自分は現時の教育者及學生諸君の三讀を熱望し、今後の時局に處して自己の運命を開拓すると同時に、大に昭和日本の使命に活き昭和維新の大理想に徹し、以て皇道世界化の實現上有意義の一役宛を演出されん事を切望して止まざる次第であります。

（昭和七・四・一稿）



文部省高等小學唱歌解説

神奈川縣立平塚高等女學校教諭
神奈川縣立厚木中學校囑託

深山桂

緒言

高等小學唱歌が文部省によつて發行されてから滿二年、均しく、教壇に立たるゝ大方諸賢は其の研究に研究を重ねた事と信じます。

筆者斯の道を進むこと、やがて、二十年、小學教育にたづさはる事、歳久しかつたのであります。現在に於ても餘暇を利し、各地に出張し、音樂講習を開き、斯の方面に少しでも貢獻したいと力めて居るのは、諸君の御承知の通りであります。

記述は或る講習で申し上げた事を整理しましたのですから、杜撰の箇所もあらうと思ひます。

扱てものは上手に授けなくとも誤りなく正しく授けると

いふ事は、やさしい様で其の實仲々六ヶ敷い事であります。況んや、これを活かして其の學科目特有の目的を達するに勿論です。大なる熱と、愛と、其の繼續が必要であらうと思ひます。

殊に、唱歌に於ては初めに正しく授けるといふ事は一層大事であります。尋常小學唱歌に於て見ても、實施後二十一年に近いが（これは四月より尋常四年までは改正、其のうちに扱ひ方をお目にかけたいと思つてゐます）未だに正しく歌へないところも或はあるといふ事です。……然しこれは恐らく筆者の聞きちがへかも知れません。

解説

文部省高等小學唱歌はこれに收められ曲數二十九、中、

單音唱歌、二十五、複音唱歌、四（何れも二重唱）施法が
らいふと。

長施法、二十六、

短施法、三（六、鏡、二一、昭憲皇太后、二五、平家の
没落）

尤も長施法でも途中で短施法に轉調してゐるものもある。
（こゝで轉調についてお話したいが略します。）

題材の向によつて區分すると、

1 日本國民として（一、日本帝國、一六、凱旋、二〇、
明治天皇、二一、昭憲皇太后、二三、鎮守に詣でて、
二九、國民の歌）等

2 歴史的の材料（五、弟橘媛、六、鏡、一五、元寇の歌
一九、旅、二二、足柄山、二五、平家の没落）等。

3 修養方面（二、進取、三、力、二三、鎮守に詣でて、
二四、農民の歌、二七、働け）等。

4 兒童の感情、意氣を主としたもの。

（四ボートの歌、八、漁歌、一一、航空機、一二、水
泳、一四、登山、一六、凱旋、一七、舟行、一九、旅
二四、農民の歌、二八、同窓會）等。

◎歌

詞

○神代ながらに、神代そのまゝに

○國を知らして、続べたまふ。

○おきてはさだか、きまりが明瞭で少しも變らない。

○君これ國、君と國とは同一。

○天つ御門、皇室を指す。

○大 家、大本家。

○御家つ子、御奴、子供、家來。

○義は君臣たり、情は父子。この語は古く日本書紀の雄
略紀に「義乃君臣、情兼父子」とあり。

○國これ家。國と家とは同一。

○忠孝一致、吾々の祖先は代々皇室に忠を盡して來たが
其の祖先を尊ぶところの子孫は、よく祖先の其の心を
受けついで、常に忠義の道にいそしんで來た、この心
は祖先の志であるから、君に忠をつくすが、即ち
祖先に對して孝になる。つまり忠と孝とは名が二にし
て其の實は一である。

◎大意及要譯

一、國の成立

二、君子の關係

三、祖先と子孫 延いては君國に對する考即ち忠孝一致
の我國民特有の精神。

◎曲節及唱ひ方（三時間）

○調子、ホ調長音階

○拍子、 $4/4$ 拍子、變格小節

○音域、ロより：ホ

5 女兒の教材（五、弟橘媛、六、鏡、九、初夏の公園）等
6 自然界に材料をとりしもの（七、海の朝、九、初夏の
公園、一〇、新緑、一三、峻嶺、一四、登山、一七、
舟行、一八、薄原、二六、落日）等。

以上は極めて大體の分け方で、見方によつてはまだ種
別が出來ませう。又聯關した材料とも見られべきものも、
澤山あるが、これを實際に運用した感じは何れの曲も形式
及内容に於て、藝術的趣味の津々たるもので、流石は文部
省の物だけある。高等小學程度の歌曲も澤山あるが、これ
が主食物的に扱つて堂々たる價值のあるは今更言を要しな
い。以下順を逐つて説述します。

一、日本帝國 高一

○音程、六度音程以内

○豫備音程練習



○初めは變格小節だが三段目から正格小節になつて居る
従つて息の次ぎ方を注意する。息を吸ふレ印のところ
前の四分音符を其の價值を充分有効にし、複附點八分
音符、又はそれ以上長く、然も、息を吸ふため、音が
切れる如くなるも、有聲音の心持を失はない様にする

○第二段ソ・ミ、と第四段ドラ、に六度音がある。

○第三段最後の小節ラシソに注意、これはロ調長音階に
轉調、ロ調でやるとレミドである。

○第四段三小節にフ印あり、特に大きいアクセシをつけ
るけれど其のため四分音符が長くなつてはならぬ。

○全曲を通じて、歌謡調に明るく歌はしむ。

○休止符は全曲中、三ヶ所、四分休止がある前の音符を
正しく歌ひ決して長く歌はず、而して正しく休止する
○第一歌詞 ばんせいいつけい、の は二分音符の様
に延してツを極めて短かく入れる。決して長く切つては

ならぬ。
につぼん は に を延ばして、つ を短かく、ぼーんの如く歌ふ。

◎第二歌詞 おほやけ は お にアクセントをつける。

第三段 ぎはくんしん の一小節の ん は 四分音符
二小節の ん は 八分音符の長さに 三小節じやう
(情)のところ、初めの附點四分音符でじやうと發音し後
は歌ひ廻せばよい。

◎第三歌詞 一段の、ちゆう(忠)は二小節の最後の四分
音符で、ちゆう と發音し次の小節に歌ひ込む 二段
かう(孝)なるも同様、三段 ちゆうこうは何れも二分
音符の様に、いつち(一致)は第一歌詞 一系と同様に
四段 ちゆう(忠)かう(孝)は前者は初の音符で、ちゆう
と發音し、後者は、二分音符の如く歌ふ。

○要するに本教材は促音、と
の歌ひ方に注意個處多し。

二、進 取 高 一

◎語 句

○彼岸、佛家の語、煩惱の苦を脱して悟りを開き、菩提
の果を得ること、こゝでは、百折たわまぬ意氣だに持
たば、おのづから光明前途に輝いて自己を導いてくれ
る意。

○艱難汝を玉にす。尋 の修身書にも出てゐる。出處は
○九似の山を云々 書經や論語にある語で一似は八尺、
實は支那の土を運ぶ道具、つまり九似の高さの山を築
かうとした時八似又はそれ以上、土を運んでも最後の
一運びを怠ると完全な山は出来ない。折角の仕事も駄
目になる憂目を見ねばならないと戒めたのである。

○一念、ひとすぢの思ひ即ち一心。

○自ら助けて云々。天は自ら助くる者を助く。

○唯人力の云々。人事を盡して天命を待つ、斃れて後や
む。

◎大意及要譯

一、不屈、不撓の精神を養へ。

二、正義を守るべし。

三、堅忍、不拔の氣象を養へ。

四、どこまでも努力せよ。

五、自助の精神を以つて自己の運命を開け。

◎曲節及唱ひ方

(三時間)

○調子、へ調長音階

○拍子、4 拍子、正格小節



○四分音符が108の速度だから行進曲風に元氣よくキビ
キビ歌へばよい。 全曲中、休止符がない、息

次は其の前の音符の極めて短かい時間を割いてなす。
この時、決して呼吸音を出さぬ様に。又周章てぬ様に
すること。

○第二段、一小節から二小節へかけて六度音程がある。

次の小節のフアが下らぬ様に。

○第三段最後の小節は 〱 で行き四段のフに這入る
様にする。

○相當に速く歌ふのであるから八分音符の續き即ち
が 〱 にならぬ様にする。

◎第一歌詞

じんせい、せは明瞭に少し短か目に、いを長く歌ふ

○音域、ハより…ニ

○音程、六度音程以内

○豫備音程練習

心持にする。

へいたんの たん、は同長、 〱 にならぬ様、はらう
のらうは 〱 にて歌ひ次の 〱 は母音オを以つて歌ふ。
ふうせつ のふうは 〱 の長さにて。

くわう みやうも各々 〱 の如くに歌ふ。

◎第二歌詞

第三段 いかにも、のかには八分音符に一音づゝ、第
四段の、かんなんは正しく四分音符に、次の なんち、
の なんは 〱 の如く、たまにす、のまには八分音符
に一音づゝ歌ふのである。

◎第三歌詞

くじふりのじふは 〱 に速かに歌ひ、もつてはもを充

分延ばし最後につを入れる。

きうじん、のじんは第一歌詞のじんせいせいの如く明瞭にアクセントを付けて歌はしむ、きづかんの、かんは八分音符に一音づゝ、こうをのこうは初めの如く延ばし、更に初めのソのところ一拍歌ひ、次のをは發音仕直して歌ふ、いつきのいつは、もつてと同様の注意にて歌はしむ。

◎第四 歌詞

いちねんこつては、のこつては、は アクセントが異なる故、弱く歌つて防ぐ。

◎第五 歌詞

みづからたすけてはを、二個同長に歌ひ、たふれては、タオレデの如く發音せしむ。

三、力

高 二

◎歌

詞

脚の力を題材として扱つた面白い捕へどころの歌である三節とも「脚を見よ」が一貫していろ／＼の變つた形であらはれてゐる。二節では最後の「靜かに坂を登り行く」

の後に「脚を見よ」となつてゐるのである、それが略されてゐる。

この歌の主意は絶えず力をこめて、少しも油斷をしないといふ點を脚の働によつて見せてゐるのである。

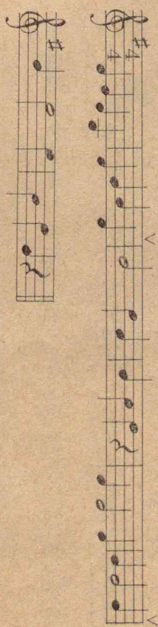
◎曲節及唱ひ方 (三時間)

○調子、ト調長施法

○拍子、4拍子、正格小節

○音域、ロより…ニ

○音程、六度音程以内(三段より四段にかけて八度あり) 豫備的音程練習



○本曲は、116リズムカルの曲で従つて正しく秩序的に唱誦するがよい。

○息次は二小節宛だが中途の「は」は前の音符が餘り短くなれば様。

○第一段の三、四小節が「」になつてゐるが私の考で

は第二段かゞだから第一段の三、四小節は「」で來て第二段でそれをうけて「」にした方が感じがよい。

○第二段一小節に音階的下行するところがあるか中途に「」と同一の音程があるそれを正確に、二小節から三小節にかけて六度音程がある。四小節の最後の四分音符を長くならぬにする。

○第四段の二小節に切分音がある——切分音は尋常小學唱歌の五年用の雪合戦に初めて出てゐる。「切分音」は何のため生ずるか、それは強拍部(アクセント)の移りによつて生じましてこれは特別の場合です。殊更な注文のためです。

第四段には前述の切分音があるため四小節の附點二分音符が短くなり勝故、正しく三拍の時價を保持する様にする。

○音階的上行、下行が曲中四箇所ばかりある。

○曲中「」の箇所多しこのリズムを正確にする。

○全歌詞を通じて「」の歌ひまはしを味ひよくした。

○第四段二小節が最も妙味のあるところ。切分音を二拍延すことは前にもいつたが、其の次の四分音符を心持延す

氣味で歌つて藝術的扱にしたい。勿論、次の小節を延すことは禁物です。

四、ボートの歌

高 二

◎海國男兒の意氣を歌つた歌。

○タラツチ Crutch 櫓架(カイカケ)

◎曲節及唱ひ方

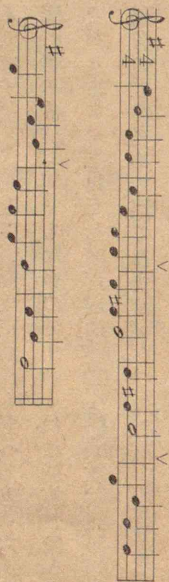
○調子、ト調長施法

○拍子、4拍子、變格小節

○域音、ニより…ホ

○音程、八度、七度、六度

○豫備音程練習



○本曲は「」=138で前の「力」よりもまだ速く、曲想は爽快に「マルカート」Marcatoに歌ふところが多い。初めの二段(こゝには反覆記號あり)一一頁の上の一段を除いた

殘餘の各段には殊に多い。

○第一段初めの「ム」で「ム」音程が困難だ。「ム」は二長調にして「ム」をやつてもよい。

四小節から五小節へかけての「ム」のレを動かさない様に。

○第二段三、四小節へかけてある「ム」を正しいリズムで。

○第三段から第六段は前の二段と全々異なるリズムで、極めて穩な旋律である。同度の音程が澤山あるから注意を要する。

○然し第四段の終りの小節に「ム」經過的に半音上行がある。(これは和聲學でいつて經過音といふのである)

これから五段へかけて其の穩を破つてゐる感がある。

○第六段前半に音階的上行がある。音階も斯ふ取扱ふとも言へない一種の旋律である。

○第七段は注意を要する箇所が多く、六度、七度音程が續出してゐる。こゝはどうしても「マルカート」に歌はなければ生命がない。一小節から二小節の「ム」これは一度上の三和音で、二小節から三小節の「ム」は五度上の七の和音で何れも同族的の音である。三和音と

は御承知の通り或る基音に三度距てて、三音、五音と重ねたもので、七の和音とはもう一つ其の上に三度距てて重ねたもので、要するに七音は基音の下の音になる譯であります。七度音程は正面から考へると、六ヶ敷様に考へるが、何でもないので。それは同族的だからであります。それで七度音程は尋常小學唱歌、五年用運動會の歌に初めて出てゐます。

文部省高等小學唱歌には七度音程が隨所に現はれてゐますが、どの音でも七の和音の七音ではなくて、これに使用してゐるのは、五度上の七の和音(屬七の和音)中の七音のみであります。これを練習するには



の如くすればよいのです。

○第七段目の終りの方は「ム」となつてゐるが、次の段の「ム」をうけるために「ム」にする方がよい。

○第八段の後半は出来るだけリズム的にして次の段に入る準備をしたい。

第八段は第一段に似てゐるが「ム」と「ム」の相違がある

から注意を要する。

○歌詞は短いが腕鳴り血潮に溢れた、海國男兒の意氣を揚げるに面の邊り見る様である。初めの「こげや」「こげや」はどちらも強く少しはゴツ／＼でもよい。然し亂暴でなく、「おるもをれよ」も「おる」の「お」に又「をれよ」のをにもアクセントを持たせて歌ふ。

「クラツチ」の「クラ」にも充分アクセントを持たせるか其のため音程が「ム」となり易いから注意が肝心である。

○第三段は「ム」、美しく音程を亂さぬ様、第四段終りの小節經過音のところは心持延ばし然も美しく歌ひ、第五段では直ちに「ム」して「あらなみ」の氣分を現はす様に。

○第七段は氣分を更へて「ム」と本にはあるが私は「ム」で歌ひたい。然も「ム」を附して、此の曲の最高潮氣分の第八段に入りたい。

○第八段最高潮氣分の同度(ラ)の連續を亂れない様にする、次の「いざこげ」の「こ」が長くなること、其の邊をキビ／＼歌ふことを忘れてはならぬ。

○「腕は火となれ」といふところがあるが、これが歌ひ様によつては(曲の強弱からいふと)人と間違へ易い。

(以下 次 號)

實業補習學校農業科講習會開催

左記の如く四月早々講習會開催さるゝ筈

一、參會者 小學校及實業補習學校農科教員

一、講師 實業教育主事 草野 徳義

一、期 日 會場及集合範圍

期 日 時間 會場學校 集合範圍

四月二十八日 自午前九時 足柄上郡岡本尋常 足柄上郡

同 三十日 同 足柄下郡千代尋常 足柄下郡

同 三十一日 同 高座郡馬場尋常 高座郡

同 五月二日 同 愛甲郡萩野尋常 愛甲郡

同 三日 同 高座郡北下浦尋常 三浦郡

同 四日 同 津久井郡串川第二 津久井郡

同 十六日 同 尋常高等小學校 中郡

同 十七日 同 中郡岡崎尋常高等 中郡

同 十八日 同 都筑郡中川尋常 都筑郡

同 六月十三日 同 橋樹郡日吉尋常 橋樹郡

同 二十二日 同 鎌倉郡本郷尋常 鎌倉郡

同 同 高倉郡小學校 高倉郡

一、講習科目 普通作物栽培法

注意事項 參會者は實習服裝を準備すべし 以上

參考 講習科目内容

四月二十八日、四月三十日、五月二日、五月三日、五月四日

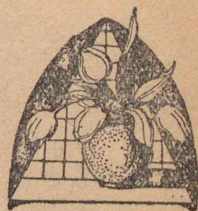
以上四日普通作物水田折衷苗代の播種及越爪の播種

五月十六日、五月十七日、五月十八日以上三日

陸稻の播種及落花生エーテル促成法

六月十三日、六月二十二日、二日間

水田插秧蔬菜園藝(周年蔬菜栽培法) 以上



書道史上より考察したる 草假名につきて

神・師專攻科
習字科研究室

小 松 和 夫

一、假名の起源と其の發達

漢字が我國に渡來して以來、その書寫は次第に盛んになつて來たが、未だ我が國語を寫すとしては、不便を免れなかつた。即ち初めは古事記、日本書紀中の歌謠、萬葉集のやうに國語を寫すに、すべて漢字の全形を用ひ其の音訓を僞つて記してゐた。世に之を「萬葉假名」と稱し「安幾破起」等がそれである。

ところが漢字は點畫複雑にして、一字を書くにも容易でなく、音韻を以て國語を寫すには、幾多の漢字を連用しなければ、一語もあらはすことが出來ないし、追々文筆を要することが多くなるに隨ひ、誰の發明となく、自然に筆記に従事したもの等が、漢字の扁、旁、冠等の一部を取つて「阿」を「ア」「伊」を「イ」「宇」を「ウ」「江」を「エ」

「於」を「オ」といふ如く、筆寫上の簡便法を案出し、遂に今日の片假名が出來上つたのである。故に片假名は、もと各種の變態があつたがいつしか淘汰されて、今日の片假名文字となるまでに、多くの歲月を経過したことは勿論である。古來片假名文字の作者を吉備眞備であるやうにいつてゐるが、勿論臆説たるに過ぎない。今日傳はつてゐる五十音圖は、片假名をあらはす音の性質によつて分類しこれを系統立てて排列したものである。この音圖も吉備眞備のやうに古來唱へられてゐるけれども何等根據のある説ではない。ことに吉備眞備の時代にはまだ片假名の字體も、一定してゐなかつたであらう。この音圖の排列の順序は、印度の悉曇に倣つて作つたものである。悉曇とは梵字を音韻の性質によつて分類排列したものである。故に我が五十音

圖が、印度の梵學に通じてゐた人の手に成つたのであり、またさういふ人でなければ製作されないものであることは明白である。然らば何人が之を製作したかといふに、それは明かでないが大矢透の研究によると慈覺大師（圓位）の流俗に屬する學僧の手に成つたもので、嵯峨天皇の弘仁頃から村上天皇の天曆頃までの間に製作されたものであらうといふことである。

又平假名は草假名ともいひ漢字の草體の更に省略されて出來たものである。即ち、以をいとし、呂をろとし、波をはとし、仁をにと、保をほとして成つたものである。かくの如くにして平假名は片假名より稍後れてあらはれたものであるがその製作者は何人であるか知ることが得ない。かの「いろは歌」は「色は匂へど散りぬるを、我世誰ぞ常ならむ有爲の奥山今日越えて、浅き夢見じ酔ひもせず」といふ今様歌であつて、涅槃經四句の偈「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」を同字なしに意譯したものである。この「いろは歌」は古くから空海の作と傳へられてゐるけれども、種々の點から見て空海の作と傳へられてゐるけれども種々の點から見て空海の作と認められないことは近時の

學者の研究によつて明である。大矢透の説によれば、いろは歌は圓融天皇の天祿前後から永觀頃までの間に、空也、千觀もしくはその派のものによつて製作されたものであらうといふことである。

平安朝は歌の全盛時代であつたので、自然草假名の使用が盛んになり、草假名は遂に漢字の草體から全然遠ざかつて、字々連綿して遊糸の如く、流水の如く、迂餘曲折して當時の歌の趣致を遺憾なく表現するに至つた。和歌が日本人の獨自の創造であると共に、草假名も亦日本人特異の製作である。

尾上柴舟博士の研究によれば、草假名は延喜附近以後發展し進歩し寛弘附近に於て其の頂上に達したもので、その殘存せる筆蹟の年代の明かに認知されるものは、主として院政時代にあるといふことである。實に平安朝時代に書かれた草假名は優美婉柔、高雅秀麗にして後世人の追隨を許さざるものである。

今左に片假名、平假名の字源を示さう。

片 假 名 平 假 名

イ 伊 の 扁 い (以)

ネ	ツ	ソ	レ	タ	ヨ	カ	ワ	ヲ	ル	ヌ	リ	チ	ト	ヘ	ホ	ニ	ハ	ロ
禰	川	曾	禮	多	與	加	和	乎	流	奴	利	千	止	部	保	二	八	呂
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
扁	化	部	旁	部	部	扁	部	略	部	旁	旁	畫	部	旁	部	畫	畫	部
ね	つ	そ	れ	た	よ	か	わ	を	る	ぬ	り	ち	と	へ	ほ	に	は	ろ
(禰)	(川)	(曾)	(禮)	(太)	(與)	(加)	(和)	(遠)	(留)	(奴)	(利)	(知)	(止)	(部)	(保)	(仁)	(波)	(呂)

ユ	キ	サ	ア	テ	エ	コ	フ	ケ	マ	ヤ	ク	オ	ノ	キ	ウ	ム	ラ	ナ
弓	幾	散	阿	天	江	己	不	介	万	也	久	於	乃	井	宇	卒	良	奈
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
一	變	一	扁	一	旁	一	一	省	一	略	一	扁	一	變	冠	一	一	一
部	化	部	部	部	部	部	部	略	部	略	部	部	部	化	部	部	部	部
ゆ	き	さ	あ	て	え	こ	ふ	け	ま	や	く	お	の	ゐ	う	む	ら	な
(由)	(幾)	(左)	(安)	(天)	(衣)	(己)	(不)	(計)	(末)	(也)	(久)	(於)	(乃)	(爲)	(宇)	(武)	(良)	(奈)

- 1 假名の美は連綿に於て特によく發揮されるが、最初は一字一字の單體を確實に練習して後連綿に行くべきである。
- 2 假名は草書の草にして、草書とは又趣の異なるものである。
- 3 假名は輕妙流暢優美といふことがその生命である。而してその中に強き力を含ませねばならぬ。
- 4 假名は字數の少ないものであるから、變化に注意しなければならぬ。多くの文字を連綿して書くときには、同

二、假名學習上の注意

メ	ミ	シ	エ	ヒ	モ	セ	ス	ン
女	三	之	慧	比	毛	世	須	不
の	の	の	の	の	の	の	の	の
一	變	變	一	一	省	變	一	明
部	化	化	部	部	略	化	部	
め	み	し	ゑ	ひ	も	せ	す	ん
(女)	(美)	(之)	(惠)	(比)	(毛)	(世)	(寸)	(无)

一の文字を避けて重出を防ぎ、又同字でも或は太く、或は細く、或は短く、或は長く又は上より續けて下を切り又上を離して下に續けなどして、筆意の變化をつけなければならぬ。

- 5 假名は漢字と交へ用ひる場合には、よく調和する様に書かねばならぬ。即ち假名の線はやゝ強く漢字の線はやゝ柔に書く位にすればよく調和するものである。

- 6 假名を書く時には墨繼ぎに注意しなければならぬ。墨繼ぎの箇所が相並ぶが如きは、見苦しきものである。

色紙や短冊などに歌を書く場合は、昔から初句三句五句で墨繼ぎをすることに決つてゐる。

三、假名の良手本

假名の手本としては普通に習ふのならば、小野鷲堂先生や坂正臣先生の各種手本が出版されてゐるから之等のものによると便利である。

文檢受験を標準として假名の良手本を列舉して見よう。

比田井小琴書 三十六歌選
近衛豫樂院書 和歌萬代帖
同 秀歌大體

同 倭 漢 抄
傳宗尊親王書 深窓秘抄
傳源俊賴書 古今集
傳藤原行成書 倭漢朗詠集

同 古 今 集
傳藤原佐理書 古今集
傳紀貫之書 高野切

書道史に關する理論參考書としては

尾上柴舟著

歌と草假名 平安朝時代の草假名の研究

同 字書に關しては

松下太虛編

かな字鑑等

四、古今假名書の大家

平安朝時代は和歌の全盛時代であつたので、自然草假名の使用も盛んであつた。この時代に於ける草假名の名家には三蹟（小野道風・藤原佐理・藤原行成）をはじめとして紀貫之・藤原公任・源順・小大君・紫式部・藤原忠家・藤原基俊・源俊賴・僧西行等がある。これ等の人々の筆蹟は、後世之を上代様と稱し、書を學ぶものゝ模範とする

ところである。

殊にこの時代の白眉とも稱すべき藤原行成の如きは後世何人もその追隨をゆるさないであらう。又紀貫之も草假名書道の上から忘るべからざる一人である。

鎌倉時代には藤原定家・宗尊親王・伏見天皇等は忘るべからざるものである。御歴代の宸翰は聖武天皇を初め奉り三筆の一人なる嵯峨天皇など各すぐれていらせられるが、その中にも假名をうるはしう御書きになつたのは、實に伏見天皇を第一に推し奉るべきである。

室町時代には假名方面にては特記する人なし。

江戸時代には先づ近衛家勲がある。彼は左大臣をへて關白太政大臣にまでのぼり從一位に叙せられた。後、落飾して豫樂院と號した。家勲は實に稀代の能筆であつて、各體共に能くしたが、特に假名は上代の名蹟を模してよくその眞髓を得た。またこの時代には寛永三筆の一人なる瀧本坊昭乗（松花堂）も假名をよくした。

明治、大正時代 明治維新は更始一新、萬事釐革を要した時で日本文化史上に於ける甦生の春であつた。書道に於ても國民精神の赴く所に従つて、書風の一變を來し、唐

様や六朝流が盛んになつた以外に、我國中古様の書法を慕ひ、假名を學ぶ人々があつて、明治二十三年頃難波津會が創設された。この會は三條實美公を初め、東久世通禧伯、田中光顯伯、高崎正風男等摺紳の發起するところで、小杉相郎、大口鯛二、阪正臣、岡田喜作等は當時の會員であつた。この會に於ては各自の揮毫を持寄る外御物や宮家及び摺紳の秘藏品を展觀し、貫之、行成等上代の古筆をも研究した。この會は間もなく消滅したが假名書道勃興の端緒を開いた功は没することが出来ない。又この頃多田親愛、小野鷺堂の二大家があつてづれも假名をよくし、多くの子弟を有して、假名書道の鼓吹に努めた。

大正となつてから、藝術の復古的運動が起り、假名方面に於ても、平安朝時代の高雅典麗な書風を研究するに非ざれば、假名の眞生命は得られないとし、上代様の研究が頗る隆盛を極めた。即ちこの時代には小野鷺堂、多田親愛の二大假名大家によつて假名書道に一大進歩を來たした。鷺堂は斯華會を起し、大いに書道の振興に努めた。而して鷺堂流（斯華流ともいふ）なる一流を成したのである。彼は楷行草を能くしたが特に假名に妙を得た。

この時代に假名とは直接關係はないが、日下部鳴鶴、西川春洞、巖谷一六、長三洲、中林吳竹、村田梅石、金井金洞、前田默鳳、日高梅溪（小學校國定書方手本揮毫者）等は忘るべからざる書家である。殊に日下部鳴鶴は我國書道をかく隆盛ならしめた。エボツク・メーキングの實に近代の大恩人と云はねばならぬ。

昭和時代、現在假名書の大家には、尾上紫舟・坂正臣（先頃没）・岡山高蔭・高塚竹堂・中村春堂・木俣曲水等の諸家がある。現代は上代假名の復興時代で、貫之行成の高唱せられる時代である。殊に木俣曲水氏は各體之をよくするが特に調和體、假名等に於ては獨自の境地を以て後進への指導をしてゐる。而して現今文檢合格者或は受験者にして氏に師事せぬ者はないとまでいはれてゐる。

以上假名書の名大家は之を各時代の代表的のものゝみに止めたが、この外にもまだ有名なる者もあるであらう。一般書道史については他日稿を草することとする。

結

び

假名は我國獨特の文字にして又之を書道史上より考察する時は東洋獨特の一大藝術なのである。之を保存し隆盛な

らしめることは、吾等日本人の使命でなければならぬ。

近時書道界は頗る活氣を呈してまいり、各地に書道展覽會等開催され、繪畫に帝展ある如く書道に泰東書道展あり畏くも總裁に東久邇宮稔彦王殿下を仰いで會頭清浦伯爵以下歩武堂々と該科の伸展向上の爲に盡力されてゐることは誠に邦家の爲に慶賀に堪へぬのである。

上野の晩秋をかざる東洋藝術のクラシカルな線の匂ひにひたるものは、皆ひとしく自國文化の深遠美妙なるに恍惚とされるであらう。かくして書道は東洋獨特の一大藝術として止揚され永遠に吾人の腦裡に深く印象づけられてゆくことであらう。稿を終るに當り起稿中奥山氏の説を参照したことを附記して筆を擱く。



教育代表山崎博君の征途を飾らしめよ

吾等の山崎博君は、本年七八月の交、佛國ニースに於いて開かる、世界新教育聯盟會議に出席されることゝなつた。

ニース會議のことは、既に本誌一月號にて紹介する處があつた如く、世界新教育研究を目標とし、各國知名の心理學者、哲學者、教育學者等が一堂に會して教育上の討議をする國際的教育會議である。

我國としては大正十三年澤柳政太郎博士の一行を序幕に、其後續いて小林慶大教授、入澤宗壽博士等の出席せられたことは周知の事柄である。然るに我國は昨年正式に聯盟に加盟し、本年始めて代表を派遣されることゝなつた。その代表者の一人として文部省は吾が山崎博君を立たしむることゝなつたのである。

軍縮會議代表、勞働會議代表の如く、今や世界諸聯盟會議の舞臺に齊しく教育代表を送る筈に慶福に堪えない。而も本縣初等教育界より君を出したことは縣教育に一段の眩耀をかゝぐるものである。

吾人教育者は奮つてこの行を盛ならしむることを望むで止まない。出發期は六月一日横濱驛發の筈。



我が縣の自然地理

高座・澁谷 飯田 義治

教材研究

はしがき

郷土を愛したい。そしてそのことは

郷土の地とを一緒にして愛する事でありたい。

愛は魂と魂との抱擁である。

母親を慕ふ嬰兒の心——その様にして郷土の人と地とを一緒にして慕ふことの出来る人間になりたい。

教科書は元來一般のものであるから、之を地方々々で實際に適用するに當つてはその土地の事情によつてその教材に輕重の差が生じて來る敷衍も附加もしなければならぬ。郷土化もしなければならぬ。それは生命の要求である。生活の發見である。

此のパンブレットが直接地理教育に當られる諸先生の御參考となり——又御高見による御批判と御教示を賜はらば此の上もなき幸である。

終りにのぞみ本校増田周吉先生より種々とお世話を戴いたことを深く感謝致す次第である。

第一編 陸 地

一、山 脈

關 東 山 脈

關東平野、甲、信、相、武、四箇國に涉り主として古生層より成る一大地塊と見るべく更に局部々々は地塊をなす。山脈は北西より南東に走り甲武信嶽（二四六九）雲取山、（二二〇〇）國師嶽（二六九二）等の諸峯あり。

丹 澤 山 脈

其の南に位し殆んど之と並行する山脈で丹澤山（二五六七）大山（二二四七）等の諸峯あり其の脈南東に走つて三浦半島の丘陵となる。若し關東山脈の連鎖を蝦夷山系に關係あるとせば丹澤山脈は千島灣外帯に之を求むるを正しとす。

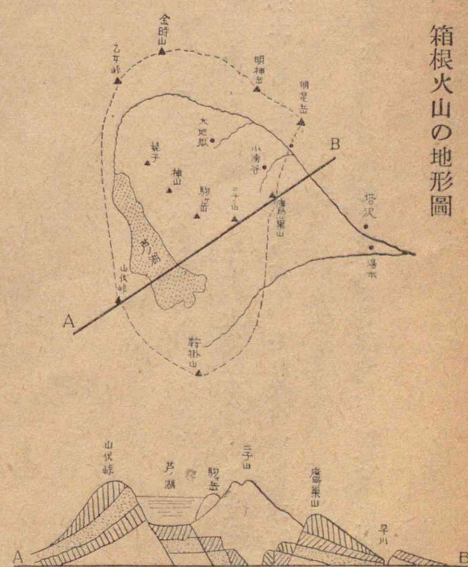
多 摩 丘 陵

多摩川と境川との間にある扇形の地域で西部で二〇〇米の高度なれども最東端（山王臺）では九二米の標高を示して居る。

二、火 山、溫 泉

箱 根 火 山

箱根火山の地形圖

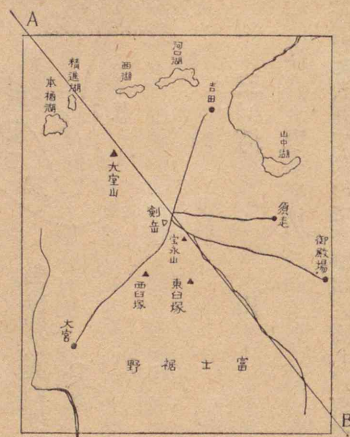


箱根火山の山斷面圖
(るよに線BA圖上)

箱根山は富士火山帯に屬する標式的の二重火山である。舊火口は南北十二軒、東西六軒に及び此の火口中に神山、駒ヶ岳、上二子、下二子等の新火山がある。

- 1 新火山を火口原。
- 2 仙石原の如きを火口原。
- 3 火口原の一部に水を湛えたる蘆の湖の如きを火口原湖。
- 4 外輪山の一部を破りて流出する如き河川を火口瀬といふ（早川）。
- 5 外輪山。

富 士 山



富士山地形圖
上圖
同AB線による断面圖
下圖



- 1 富士山の寄生火山（三十餘）
- 2 單成火山としての富士山

溫 泉 の 分 類 （日本鎮泉誌による）

- 1 單 純 泉
- 2 硫 黃 泉
- 3 酸 性 泉

- 4 鹽 類 泉
- 5 炭 酸 泉
- 6 ラヂウム泉

箱根火山中の溫泉

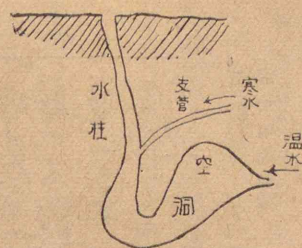
泉 名	泉 質	溫 度	地 質	海 拔
大湧谷	硫 質	90	安山岩	M
小湧谷	硫 質	90	及 集塊岩	504
姥 子	弱酸類泉	45	同 上	888
芦ノ湯	硫 質	49-46	同 上	850
木 賀	鹽 類	41-40	同 上	424
底 倉	鹽 類	72-43	同 上	436
宮ノ下	弱鹽類	48-40	同 上	334
堂ヶ島	鹽 類	87-48	同 上	422
塔ノ澤	弱鹽類	45	同 上	129
湯 本	單 純	44	同 上	304
湯ヶ河	鹽 類	70-40	同 上	240

（附 記）

火口原中に噴出する溫泉は活動の中心に近き程硫黃泉にして之を遠ざかるにつれて單純泉に變化す。一般の原則としては中心部に近き所は硫氣又は酸性の氣水—鹽類—炭酸—單純泉となる。

熱海間歇温泉

熱海間歇温泉は第三紀凝灰岩の裂隙より熱湯と蒸氣とを交互に噴出する立派なる間歇温泉にして熱海火山爆裂火口の底にあり。以前は長は其の活動時間約十二時間も繼續し此の間湯と水蒸氣とが間斷なく噴出したと云ふ。大震災以前に於ては一晝夜に五回の噴出をなし居りしが、近年湯井濫掘及び地震の影響を受けて今は只熱水が湧くのみである。



熱海間歇泉の理を示す圖(上圖)
(本多、寺田氏説)

三、河川

多摩川

東京府に入りて初めて多摩川と稱し、青梅町の南に至りて流路を東南にとる。此の附近兩岸は砂礫層より成る平均十

五米の河成段丘を作る。河口附近に於ては川舟が上下して居る。(ミルクキヤメル工場附近に見る)

所謂本邦六玉川の一にして其の水清く上流地羽村より同河を分派せしめ之を東京市に導きて飲用に供す。玉川上水の村山貯水池これなり。

鶴見川

東京府下原町田の東北より都筑郡に入り思田川となる。此の河は争奪が行はれ即ち截頭河である。其れは境川のため思田川は Beaded された。思田川は浸されて境川と連絡して居る。横濱線は此の線を利用して附設されたるものである。以上二河川のため東京灣に於て複合三角洲を作つて居る。

境川

相原の北方七國峠(二三三米)の南方に發源す。此の河も境川斷層線を利用して南流して居る。處により高さは異るが八王子の南方の七國峠附近にては五十米乃至七十米の崖を見る。尙河口に至りて流路は砂丘のため東南流して居る

引地川

相模野、臺地上を流れる一つのコンセクエント・バレー、

(Consequent Valley) を流るゝ順流 (Consequent River) である

此の流域の御所見村に六地藏と云ふ地名がある。此の附近に盆狀の低き所が見られ此の上段の部は撓曲せる地形をなすので引地川は所謂先行性の川として有名である。

相模川

相模川は山梨縣の山中湖に發し猿橋附近にて富士熔岩流の末端を切開して峡谷をなし又侵蝕作用の結果河成段丘の美事なるものを作る。此の段丘面は桑園となり、鐵道、道路が容易に附設されてゐる。所謂豁口聚落(湘南村以下)以下は舟を通ずることを得る。湘南水道の水源地は寒川村に於ける相模川の狀流を用ひることである。

花水川

花水川は其の水源を殆んど全部大山(雨降山一二五三米)の周邊に發するものにして幾多の小流を合流する狀誠に面白き川である。

又多摩川の上流淺川及び花水川の上流秦野盆地に於ける水無川としても又花水川支流の争奪も研究上面白い。

●水無川——秦野盆地には扇狀地は (fan) 普通半圓狀をなせる此の盆地は好く地圖上にみられる。

上流は水あれども fan 上には水がなくなり伏流となるからである。水無川と水田及び煙草畑

酒匂川

酒匂川は神奈川縣の河川中尤も損害の夥しきものである。

原因 1 降水量多き地域に源を有すること。

2 傾斜の比較的急なること

上流河岸段丘上には富士紡績の工場が配置されて居る。そまつな礫層であるから地震の時には工場が全部倒壊す運命にある。水に富むことはこの谷間に文明式の工場聚落の發達に與つて力があつたことと思ふ。

早川

海拔七二六米の蘆の湖に發源す。峡谷をなし數個の河成段丘を作り海に入る。

(附記)

本縣河川の概要

- 1 水源を他府縣に發せず本縣内に發するもの多きこと
- 2 流水の割合に水量相當大なること
- 3 水運の便あるもの少きこと(多摩川、相模川)

- 4 水源に湖沼をもつものと湧水をもつものとがある
- 5 水力電氣に利用せらるゝと(相模川、酒匂川、早川)
- 6 米産地と水量(酒匂川附近の米質は日本一である)
- 7 砂礫を提供すること
- 8 氾濫の多きこと
- 9 河道の海中に延長すること

著名河川

河川名	流域國名	舟 筏	里 程
多摩川	武藏國	流域水源ヨリ河口迄 縣内舟筏	二五里
相模川	相模國	縣内流路 同 舟筏里程	一八里三〇町 一七里
酒匂川		縣内流路 出水時ノ他舟筏通ゼズ	六里一七町

諸河川の魚獲調査(昭和 年度)

河川名	魚獲量	價格	河川名	魚獲高	價格
境川	九〇貫	二、〇三圓	花水川	一、六四貫	三、五三圓
酒匂川	四、八八	三、七〇七	鶴見川	六、五七三	一、一五〇
早川	九〇四	四、六四三	相模川	一五、三二〇	八三、〇一九
多摩川	一七、六三〇	六、七八三			

四、湖 沼

火口原湖としての蘆の湖

駒ヶ岳(一三二六米)の噴出に依つて蘆の湖は成生せられた。始めは唯湖水の潛水所たりしが水量は逐次加はり須雲川溪谷に流下せるが其後(湯ノ花)爆裂の泥流に依つて一時閉塞したる形跡あり、其のため早川口に出口を作れるなり、近年鱈の養殖行はる。

蘆の湖 湖面海拔 面 積 最大深度 錐測者

七二六米 七〇方里 四六米 田中子爵

舊潟湖(湘南地方の砂丘間のもの)

國道以南の農村は砂丘間の舊潟湖であつた。此處では野菜の栽培が主である。本鵜沼はこの模式的なものである。

五、平 原

相 模 原

西は越生、八王子、構造線より東は多摩丘陵との間にある平野である。表面は多摩丘陵と同様ローム層に掩はれ其の下には砂利層又は礫層あり更に其の下には南方によくある三浦層の凝灰岩がある。相模原は非常に平坦な地形(幼年期)をなしてゐる。東西平均の幅員七軒、南北三十軒に餘る隆起三角洲である。

相模原の甘藷、麥、桑園、略

湘 南 地 域

相模原の(高座郡)南端には高さ三十米乃至五十米位の東西一直線に奔る斷層崖より南は海岸平野の地帯にて我が國稀に見る大砂丘地帯が好く發達せる處なり。幅は三乃至五軒長さは二軒に達す。

湘南地域の蔬菜(郷土科學第九號)

秦 野 盆 地

丹澤山塊の隆起に伴つて陥没した南斜面の秦野盆地は東西走る二個の斷層崖によつて限られた斷層盆地である。盆地と特種作物、煙草との關係、略す。

六、地 殻 の 變 動

海岸線の變動

A 本牧岬附近 殊に西南側は斷層崖をなす所多く、三溪園附近に標式的の所あり斷層には汀線下降の證たるべき穿孔貝の遺跡は現水面より數米の所に存す。

B 劍岬、城ヶ島間 は東西に走れる斷走線に沿へる海岸にして出入稍多く斷崖をなす所多し。然して此の附近には汀線下降の結果海蝕谷が海抜十

數米の所に横はるの奇觀を呈し且つ同時に海成段丘も存在す。

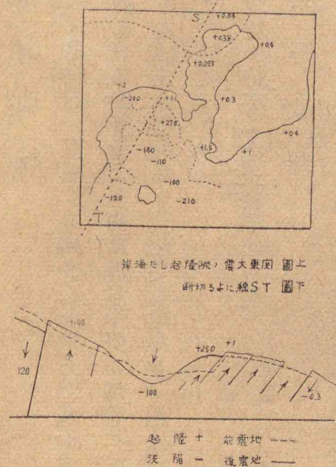
C 小田和灣以南 多摩丘陵の南は第三紀層より成る三浦丘陵である。三浦半島は丹澤山塊の南東延長で高麗山、姥島、江の島兩者の連絡を證明する。三浦半島の南端(小田和灣)以南は低い平坦な海蝕臺地を現して居る。此の事實は海底の隆起を示し、後沈降して城ヶ島を分離し三崎の良港を作つた。

平坦なる臺地面は東西の向斜軸、脊斜軸を以て褶曲する砂岩或は凝灰岩層を截斷し其の上には水平層を載き外部の第三紀層と全く時代を異にする介化石が其の中にある近世の隆起海岸として知られて居る三浦半島の先端に近い三崎油壺に据へてある(驗潮儀)の大正十二年關東大地震前の記録によると此の地方は年々平均四耗程度の漸進的低下を行つてゐたのが地震前三年程より逆に多少の隆起を示すやうになつてあ

大地震と共に一躍一米五〇釐も隆起したのであつた。
常に地塊は沈降、隆起してゐるのである。
○三崎附近には水面上高い所に穿孔貝の跡あり。

E 大磯、國府津間の海蝕臺地の所は磯から急に十數米高い
此れは海岸が波浪の浸蝕によつて海崖が退却するときに浸蝕を免れて居た處が土地の隆起に依つて現在見る如き地位を得て、其のブラットホーム様の所に東海道線、聚落大磯小學校がある。

F 關東大地震の際に起れる地殻運動



○相模灣底地塊隆起の著しきは二五〇米に及び陥落の著しきは二〇〇乃至三〇〇米に及んだ。
○大震に依つて 隆起した江の島の南岸片瀬と島との間徒歩にて行くことの出来ること。
○大磯の隆起

照ヶ崎の岩は白い筋があらはれて居る。もとは海水に浸つて居た海草が永久に涸死した色である。

(附記)

驗潮所所在地

本州 鮎川 (陸前) (油壺、相模) 串本 (紀伊) 輪島

(能登) 外ノ浦 (石見) 岩崎 (陸奥)

神奈川縣の海岸線二二〇呎

(全國海岸線延長に對し約七十分の一に當る)

地 震

關東地方に於ける大地震表

年 代	震 央 地	摘 要
弘 仁 元 年 七 月	關 東 大 地 震	武、相、常、總、下、野死者多シ
建 保 元 年 五 月 廿 一 日	鎌 倉 大 地 震	
安 貞 元 年 三 月 七 日	同	前

一、震央地位置を伊豆田方郡浮橋附近即ち東經一三九度〇北緯三五度一とす (中央氣象臺) 併し地震記象の複雜性及び初動方向の集合點と初期微動時間による想定點の相違並に被害分布等よりして初震は前記一點に發生したる可きも箱根山より田代、丹那の兩盆地を経て浮橋に至る略南北に亘る約三〇呎の斷層線に沿ひて發したるものと信ぜらる。



二、震度
烈震
三、震央に於ける發震
時午前四時二分四十

六秒。

四、震域人身感覺による震域は震央を距る五百七十呎松山測候所に達し、東は震央距離三百六十呎なる山形測候所に亘り其震度分布次の如し。

正嘉元年八月廿三日	同 前
永仁元年四月十三日	同 前
永享五年九月十六日	相州及會津大地震
慶長九年十二月十六日	武、相、房、總大地震 大津浪アリ
元和元年六月一日	江 戸 強 震
寬永五年七月十一日	同 前
同 七年六月廿三日	同 前
同 十年一月廿一日	小田原強震
同 十二年一月廿三日	江 戸 強 震
正保四年五月十四日	武 藏 強 震
慶安二年六月廿日	武 藏 強 震
同 年 七月廿五日	同 前
寬文十年六月五日	相 模 強 震
元祿十年十月十二日	武 藏 強 震
同 十六年十一月廿三日	關 東 大 地 震
天明二年七月十二日	小田原強震
文化九年十一月四日	武 藏 強 震
安政二年十月二日	江 戸 大 地 震
明治廿七年六月二十日	東 京 大 地 震
大正十二年九月一日	關 東 大 地 震
大正十三年一月十五日	武 藏 強 震
昭和五年十一月廿六日	豆 相 地 震

豆相地震 (本縣にて呼ぶ)

豆相地震の驗震概況

江 戸、小田原被害最モ多シ
震央相模川下流
丹澤山塊ニ發セリ

烈震區域 神奈川縣箱根附近一帶より伊豆田方郡に亘

る面積一二五〇平方料

強震區域 神奈川縣、靜岡縣、東京府及千葉縣の一部

に亘り面積三二〇〇平方料

弱震區域 愛知、新潟、岐阜、千葉、埼玉、山梨、長

野、大阪等の諸府縣に及び陸地面積大約八

六〇〇平方料に達す。

五、發震機構

今回の烈震は北は縣下箱根附近より南は靜岡縣下伊豆中大見林に達する一線上に帶狀をなし凄慘なる災害と稀有の地震を伴ひ此の距離數三十五料に亘る。而して大震の發震機構に關しては各地測候所の地震記象驗測の結果丹那活斷層による地塊運動と認めらる。是に就き中央氣象臺は次の如く公表せり。

「各地方測候所に於ける微動計の記象より初動方向を求め、之より其の地震機構を求めたるに箱根山より田代盆地、丹那盆地を経て浮橋に至る略南北の斷層線に沿ひ西側地塊は南方へ、東側地塊は北方へ變位せる事を示す。即ち斷層の北西側たる三島、沼津、松本、長野、高田、岐阜、彦根、福井等の初動は南々東乃至南東を

指し北東側なる東京、横濱、柿岡、熊谷、前橋、宇都

宮、水口等の初動は北東をさす。又斷層の南西なる濱

松、京都、大阪等の初動は西南西を指す故に前記斷層

線に沿ひ斷層地表に現はれたるものなるや、否やを確

定せんがために之を踏査したるに前記斷層を明瞭に地

表に認めたと共に他にも新斷層を認たり」(北伊豆地

震狀報)更に今春(昭和五年)頻發性地震を發したる

伊東地震に比較し其の機構全く一致し兩者間に密接な

關係あること及び其の原因に就て中央氣象臺國富技

師は次の如く發表せり。初動方向によつて今回の地震

の發震機構を求めて見ると、夫れは伊東の頻發性地震

の夫れと全く一致してゐて或る想定斷層線を境とした

地塊運動であることを示してゐる。

即ち略南北に走る斷走線を境として西方地塊は南方へ東方地塊は北方へ相對的地塊運動をなしたことが明白になつた。

之は驗震學上より求めたものと、實地踏査の結果とが全く一致し其の間に何等疑念をはさむ餘地がないものである。(中略)

從つて伊東、北伊豆兩地震の間に密接な關係がある事も當然考へられ様と思ふ。即ち伊東地震に現はれた想定斷定線は丹那斷層線と略平行して居て此の兩者を伊豆半島中の雁行裂罅と看做すことが出来るであらう。斯くして伊豆半島に加へられたる歪の一端として伊東地震が考へられ、更に他の一端として北伊豆地震の原因が考へられる。而して此の歪力の原因の一つとして關東大震前後に起りたる一大地震が又考へられるであらうと思ふ。(北伊豆地震報告)

關東大地震

一、震源地 關東大地震の震源の位置を決定すると初動の方向は何れも國府津、小田原邊で出合ひ又距離の方も之を調和する結果となる。志田博士は國府津、小田原邊の震源の外に尙房州の東方に於ても殆んど同時に裂罅を發生したもので東京、銚子等は先づ此の震源から發した初動を感じたものであると解釋されてゐる。

場 所	初 動 の 方 向	震 源 距 離
京 都	南七九度西	
大 阪		三四六料

二、地殼の隆起及低下

○陸地隆起の概測の結果(松山博士による)

一、相模灘北岸で最も著しいのは大磯の海岸で一、四米隆起した。

二、大島は〇、三米低下した。

三、伊東の沖の初島は二米近くも隆起した。

四、城ヶ島は一、六米の隆起。

五、房總半島では富津に於て〇、五米の隆起、

六、布良の海岸は二、二米の隆起。

七、三崎邊では震後約三米の隆起をなしたが二、三週間を経た頃から舊に復し始めて十月の始めには一、六米程になつた。

○海軍水路部の公表によると相模灘に於て伊豆より初島の東方を北に進み眞鶴崎の東南から南東の方向に引いた曲線を境として、それより北の海底は局所的に百尋前後隆起し南部は六十尋に近い沈降を生じたことを測量艦の略測によつて發見した。

○土地隆起の状況を考へるに明かに震源地を通じて略北面より南東に走る方向を考へると此の方向に沿ふ隆起帯が出来てゐる。

三、地震の性質及原因（松山博士に寄る）

- 一、震源の深さが斯く深い（三十料）のと振動が稍や緩慢であつた事等から押して今度の地震は剛體破壊のためでなく粘性變形のためと思はれる
 - 二、重力の分布から考へて寧ろ大陸移動の傾向のために關東平野の下では南微東に向つた歪力が働いて居て之が地震の原因をなした。
 - 三、此の歪力のための粘性變形の結果として西北から東南に渡る方向に沿うて陸地の隆起及低下を生じた。
- 水平の方向にも三浦半島及び房總半島が南微東の方向に移動したものと思はれる。

昭和五年地震檢測概況

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
震度													
0微震(無感)	27	74	439	77	313	38	36	30	28	27	139	9	1320
1微震(有感)	2	1	13	—	9	—	—	—	1	—	12	—	38
2弱震(弱方)	—	3	4	1	3	—	—	2	1	2	2	—	18
3弱震	—	1	6	—	2	1	—	—	—	—	—	1	11
4強震(弱方)	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
5強震	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
6烈震	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	29	79	462	78	327	39	36	33	30	29	154	93	1389

四、此の地震は三浦房總兩半島及廣く關東平野に現在ある地質構造を形造した經過の一過程である横濱測候所に感震せしものは一三九四回にして前年の四四五回に比し九四九回の増加にて實に三倍餘に當る其内六十九回は有感震地震にして他の一三二〇回は無感覺地震に屬す。

而して三月最も多く四六二回を數へ五月之に亞ぎ一月と十月最も少なく各二九回にすぎず本所も斯く多數の

發現を見るに至りしは前記同様伊東沖の地震と北伊豆地震との頻發に基因せしものなり。

各月の感度數は上の表の如し。

次に本所に於て檢測せし地震の震央地に就て見るに最も多きは太平洋西部及其沿岸所謂外側地震帯に發したるものにして九百九十二回あり。就中伊豆、伊東沖にのみ八一七回を算す。次には伊豆半島内主として丹那、田代の活斷層中現れしもの即ち北伊豆地震群に屬す可きものにて一九七回を測れり。又關東地方の河川流域及東京灣内等に發したるもの即ち一六四回にして内横濱附近に五二回現れしも一回の有感微震の外は何れも無感微震に終れり。併し其南方沖合なる浦賀水道に於て八月—七日夕刻強震（弱キ方）一回（地震番號一〇六二）を突發して都人を愕かせり。次に十一月廿六日拂曉の北伊豆烈震（地震番號一二四一）は本年中の最強なる地震にして昭和二年三月七日の北丹後地震に比較す可き破壊的地震にして震源は長大の斷層内に多數復震源を有せり。従つて其被害は靜岡縣田方郡に激甚を極めし已ならず本縣内に於ても箱根附近に甚大なる破壊的被害を及ぼせり。本所は直に縣下の状況を調査しさに豆相地

震報告を刊行し關係各方面に頒布せり。其の他遠地地震にありては北はカムチャツカ方面より南は南洋方面に亘り西方ビルマ波斯の大震をも感せり。

地震の原因となる地盤の斷絶

- A 水平的の斷層 即ち横喰ひ違ひのこと
- B 裂罅の形成及び裂罅と横亡と同時に起る場合
- C 陥没及び裂罅の萎縮に分たれる

地震の強弱

- 1 微震 靜止して居る人若は注意深い人で始めて感ぜられる
 - 2 弱震 戸、障子が鳴り垂下物の動搖液體の振蕩を起すもの
 - 3 強震 舊い建物を破損し牆壁に龜裂を生じ石燈籠を倒し、振子時計を停め瓶水を流出させるもの
 - 4 烈震 震動が最も激烈で家屋を轉倒し、山嶽を崩し地盤に大變動を生ぜしめるに至るもの
- 大氣の作用
湘南砂丘帶

沿岸潮流の作用によつて砂丘が生ずる際に若しも砂丘の供給が豊富であるならば、次第に濱の面積は増加し海岸線は海の方角に進出する。此の作用をプログラデーション (Progradation) と云ふ。

相模茅ヶ崎、藤澤附近では舊砂丘海岸に略直角なる箇々の砂丘郡として散在する。

砂丘地帯に於ける特相 (郷土科學第九號經濟上より見た相模野) (飯田義治參照)

河水の作用

桂川の猿橋附近に於ける峡谷。

谷の横斷面の形を支配する條件は流の下方侵蝕と谷壁に於ける風化と雨水による崩壊作用である。

前の作用のみが働くならば谷の形は全く垂直の岩壁に挟れた狭い峡谷となるであろう。此の形は猿橋に於ける桂川の如く峡谷を作る。

相模川に於ける砂利と上流の地質との關係。

河床を埋めて居る砂利を見て上流地方が略どんな地質の地であるかを判定し得られる。即ち砂利の多くは上流地の構成岩石の破片である。例へば相模川の砂利は安山岩質のもの

のが多數混入して居る。此れ等の争から、鑛山發見の端緒を得る事がある。

扇 狀 地

或る川が急に山中の谷の間をはなれて急に傾斜を減ずると今迄運搬して來た荷物の殆んど全部を放棄して谷の出口を中心とし扁平な圓錐圓が出来上り多くは大小のものが隣合つて互に其の發達を碍け合ひ略扇形を呈する。扇狀地の表面に於て河水は時として分流を生じ又砂礫に滲透する部分が多くなるから運搬力は次第に減ずる。

各河川に於ける三角洲の發達

河川が海に注いで多量の沈積物を運ぶ際に海の深さが比較的大きく無く又海底が不動であるか、少くとも極めて徐々に沈んで行く時には砂や泥土は堆積して海面上に極めて緩傾斜の平野を築く、各河川に於ける三角洲はかくて出来たものである。

海水の作用

江の島の洞窟、三浦の城ヶ島

海蝕作用の一好例は各沿海斷崖地に洞門を穿つを認む可し斯る洞門は斷層裂罅を求めて蝕入することを常とす、相模

江の島の洞窟は斷層線を穿ちて成り、三浦の城ヶ島の洞門は斷層に沿つて海水の作用によつて出來た。

附 江の島は鎌倉郡川口村に屬し、砂路一線殆んど歩いて至るべく、今は橋梁を架す。

島の周圍約二軒風色甚だ佳く島上辨財天を祀る。

三浦半島東西岸に於けるリアリス式海岸

柴より觀音崎

柴より觀音崎に至る間は幾多の異なる方向に走れる斷層線のために海水の浸蝕作用は其の場所に向つて威力を逞しうし之がためにリアリス式の海岸を形成し、小島嶼は絶好の要塞地域を形成し追濱、田浦、横須賀等の諸地を作り相當の水深を有す。

觀音崎より千駄崎

觀音崎より千駄崎までは逗子、横須賀線及一色、久里濱線の地弱線の海に没するところなるを以て茲にリアリス式の相貌を呈し二灣を形成す。又城ヶ島より小田灣に至る所にもリアリス式海岸が發達して居る。

陸島 (亞島) としての江の島

濱が次第に發達すれば屈曲の乏しい弓狀となり陸地に近い

島は砂洲によつて陸地と連絡するに至ることがある。江の島の如きは其の幼年期にあるものでかゝる島を陸繋島と呼ぶ。(次號へ續く)

山崎博先生の著書

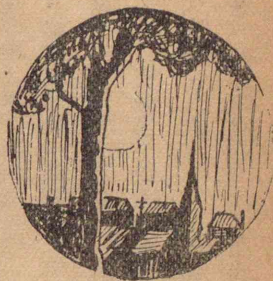
題して『郷土教育のカリキュラム構成』といふ。郷土教育の實際的施設の參考として絶好の良書である。其序に曰く

教科課程は教育の中心生命である、そして教科課程の構成とその實行とは教育の全體であるといつてもそれは決して過言ではないと信ずる。

こゝに我が郷土教育は、明日の郷土社會のために今日の郷土社會生活を生活せしめるものであると解するならば、兒童をしてその生活する社會環境を理解し、郷土情操を感得せしめねばならぬ。

郷土教育のカリキュラムは實に、この郷土理解と郷土情操を感得せしむることを目的として構成せらるべきである、郷土教育の實施は新教科課程の構成をまつて實現せられる

かくて新教科課程の構成と實行、これこそ郷土教育の生命である。私の小著もこの生命の交響であり、現はれである。聊か實際教育の參考とならば幸甚の至りである。



平塚町の地理學的考察

平塚第一校 中 丸 壽 郎

昨年十一月號郷土科學（秋季特別號）に香川先生が、湘南聚落の地理學的考察を發表されました。其の後章否結論とも言ふべき項に「今、此の湘南に三つの新しい市制が行はれんとしてゐる。一は、純休養地としての鎌倉、一は商工業地たらしめる平塚、他は國立公園の門戸としての小田原である。共に人口二、三萬、接續都市を合して四萬内外である。果して何れがトップを切るや」と述べられて、三都市の地理的發展プロセスに及んで居れます。今や平塚は機を得まして、其の最前線を切つたのであります。

明後日の官報に於いて「平塚町を廢し、其の區域に平塚市を置き来る四月一日から實施する」との旨平塚町長に既に内通があつたとの事です。顧するに、昭和四年四月一日に隣町たりし、須來町と今併致し、日尙淺き、平塚が如何に

して、これだけの發展プロセスとなりましたか、全く意外其の物であります。然しそれは別に云々する事もありません。これ實に平塚は地理的環境に恵まれた賜であります。其の好條件に幸された、平塚そのものの一部をのべようと思ひます。

先づ順といたしまして、

平塚町の地理的位置を考へますに、平塚は相模川と花水川とに挟まれて東西を界され、且北部は海軍火藥廠工場の中央部にて化石砂丘谷 (Shogun Valley) の一大低窪地によつて自然的に大野村との北限をなし、地形的に、政治的に獨立してゐます。地形が政治的地理區を限定したデビカルな Region であると思ひます。

此の地域の稍中央に現在の樞要區なる平塚の市街が展開

されゐるのであるが、これは相模川のもたらしたる結果であつて一寸と不思議に思はれるが、水害を除去するためであつたのであります。

唯須賀區が川に接近してゐるのは、生活上の問題である上に前古に於いての須賀港として殷盛をしたる結果である事は古書に見へてゐる點であります。

この平塚市内に於いて大きく見る時に（大地理區）四つの人口密集地點を見出す事が出来るのであります。其の一は上平塚の純農村區、其の二は平塚區、其の三は須賀區、四は海岸休養地域であります。今それ等について稍々細かく地理的卑見を述べてみませう。

〔一〕上平塚區、花水川流域一帯の水田と大野村方面の低窪地及び低砂丘塘に生活基底を置いた戸數四二、人口三〇二人を有してゐるまとまつた地域であつて都市化した平塚區に取り殘された平和な且質朴な平塚唯一の農業聚落であります。

平塚附近産として名を市場に馳ゐる蔬菜（葱、胡瓜、茄子、大根、花卉）等の新鮮なるものは主として此處から供給されるのである。早春此處を訪れる人には各農家の庭園

の促成栽培溫床に驚かされるであります。特に甘藷苗の生産は著しく、静岡、東北方面にも送移されると言ふ事です。尙夏秋の收蒔季には其の農村風景が如實に展開されます。

平塚區との距離は約三料を持てゐるが、市内自動車の便もあつて、交易上には都合がよい。平塚區が都會化された風俗、習慣の尖端を進行するにこゝは、何處までも質朴、靜素と富の平均とに於いて全く正反對なる對照を表現してゐます。

上平塚、鑛泉、關東山地と關東平野とを分離する川尻——平塚に至る地質構造線上に硫黃、鹽分を主成分とし、其の他ラジウム等を含出して湧出する鑛泉にして手輕と閑靜とを兼備した湯遊地として四時入浴者が多く、春時の散策期には特に賑ふのであります。

〔二〕須賀區、相模河口に發達したる漁業聚落であつて昭和四年四月一日まで戸數一九〇四、人口一〇三七八人を擁した獨立的な須賀町であつたのであります。地形の一系、距離的產業的、交通上等の地理的見地から兩町の對立は合法的でない理由の下に合併の議がなりまして、急轉直

下合併となり平塚町の一部として今に至つた須賀區であります。

此處は上平塚の純農業聚落に對して純漁業聚落として平塚の二大特色地域であります。此處は背後に平塚の最高所（一四、三M）と言はれる帶狀砂丘を背ひ海を背面にして構成されてゐる點海に生活恩恵を受けつゝありながら、かくあるは西南卓越風の關係からであります。

區内は特有の迷路を持つて初めての者には其の案内に困窮する程で、特に海岸よりの南町に至つては相當に馴れたる者にてても其の案内に困まる程の袋町であります。これは我が國の城下町に見る袋町のそれとは全く其の構成を異にしてゐて、須賀は菅賀で其の當時は相模川口一帯は沼地で菅の繁茂した所で、この菅を切り開いて、耕作地にしたもので、あるが、河口の變遷常なく、乾田は水田——に更に砂の影響を受けて、其の機能が薄くなつた。ために海に生活資源を求めて今日の狀態になつたのであるが、其の迷路は、其の當時の面目を持つてゐるのであります。路は往時の徑畔であつたので、何れ今日の如く耕地整理の行はれぬ時代の現れであります。この迷路も大變異毎に劃然たる

ものになり、土族學的に意義深い迷路も其の面目を失ふのであります。

海岸寄りの地點に魚市場が建設されてゐます。伊豆沖から八丈沖の魚獲物がこゝで取引され平塚驛經由で冬鰯は京阪神に京濱地方に販路を廣め、仲々盛なるものであります。尙元は須賀漁夫の兩肩によつて上溝から青梅方面まで、其の足跡を残したものであります。今では兩肩に變つて自轉車によつて其の商圏の維持を見てゐます。（これについては地理學講座、地理、二卷二號、二卷四號、）此の聚落の生命即ち經濟中心は漁業なる關係上漁獲不振は直ちに生活をおび

やかすので、從來から兼農が行はれ、西瓜、南瓜、茄子、等の輕鬆土質と短期間に生育する蔬菜と麥類が栽培され、特に西瓜は名高く「須賀ノ西瓜はコイナ、今花盛りヤンベカ、ヤンベカ」と謳はれてゐます。近年不漁時の打撃によりてこの兼業にも力を入れてゐる上に馬入川の砂利採取にも力を入れてゐます。川口に常に砂利取船が見えてゐます。

〔三〕平塚區 これは平塚町の核（セントラル、ホール）を構成してリジョンで其の生命は商工業等の知力的生産即ち交易等の人類活動の最も旺盛なところでありま

す。これは更に新宿區、馬入區、本宿區、北平塚區、等に區分されるところであります。

東海道を東西に挟んで發達してゐます。市街地は東西に貫く東海道に沿つてゐます。花井理學士は東海道は *Swales* だと言つて居られますしこの地方の研究に精通して居られます香川教諭は *Swales* の埋積した低地に東海道が通り其の兩側に市街が發達したものであると言はれてゐます。其の狀あたかも凹字形を示してゐるので、凹字形聚落と言ひたい景觀をなしてゐます。平塚區の胎芽ポジションは、本宿區（平塚銀行邊）あつたのでありますが、鐵道開通に對して驛問題でそれより一、二軒も東方即ち新宿區に寄らしめられたのであります。これが本宿區を淋らせ、且又新宿區の今日あらしめた最大原因であります。交通景が人類生活に及ぼす地理的事柄の重大性も察する事が出来ます。

平塚區の東海道を距れた地域即ち北平塚區は主として工業地域にして新興工業景を現してゐます。其の主要工場をあげれば、官設の火藥廠工場、關東絹紡、相紡、守山、森永ミルク工場、米善醸造、日本製氷、日本寫眞工業等で、人造肥料、鉛筆、石鹼等の小工場も見ると出來ます。

〔四〕休養地域 東海道線南側の別莊地、東海道以北の

住宅地がそれであつて、其の閑靜と空氣の清澄、岸邊の觸感と天然景とはこの地域の持つ特色で、休養地的色彩を急テンポに發現した地域であり、且海水浴に名をあげ「海は遠淺、コイナ、島の御神火、見て浴る、ホクリ／＼」と謳はれてゐます。（細詳は地理と歴史六年六月號）香川教諭は、湘南の別莊は茅崎と平塚は數も少なく出來方もおくれた即ち既に地形と氣候によい地方が密集してからはじめて分散的に出來るやうになつたのであるとのべられてゐる。

結論をいたしまして將來の平塚について一言して愚考の終りとしたい。歴史的に平塚は舊宿驛シコトラセンドルフと言ふのみでなく地方商業の中心であつた事、即ち相模川を境として東は藤澤、西は平塚が、コンマーシャルセンタ―となつてゐた事は香川教諭が既に發表されたところでありま

す。平塚は今やシユトラセン・ドルフと言ふ事は忘れてコンマーシャルセンタ―或はインダストリアル・センタ―として其の名を上げて來たのであります。

平塚のヒンターランドは物質豊かに且人口稠密の中郡の

平野を控へて、物資の生産、消費に遺憾なく、平塚をして中郡の咽喉たらしめてゐるので中郡のエコノミックスセンターとなつて來たのであります。

最近の調査によりますと平塚は山口市、高田市、倉敷市尾道、丸龜と同等、それ以上の人口を持ち内容も形式もこれに劣らぬと言ふ點から考へまして市制施行も無理なからぬ事でありまして、極めて明るい新興的氣分にて滿され「月がくだけの馬入の川セネオンサインよ平塚よ、アノ灯チラ／＼トモトテモ、サ、コレカラヨ」と謳はれてゐます。

平塚は將來に於いてどんな過程を辿るか、これ實に興味のクライマックスであります。

尙この研究に對しては平塚の第二校の井出君(舊今井)が市制施行記念に「平塚市地誌」を編れる事になり、既にデータが山積されて平塚がドット・マップ化され、グラフ化されてゐます。井出君が再び本誌を通じて發表される事になつてゐる。私の不足分愚考は井出君の研究によつて補はれる事と思ふのであります。再び平塚町の地理學的考察に耳をかされん事を希望します。

終りに多くのデータを下された香川教諭に厚く意を表します。(湘南地理學會に於て講演拙稿)

廣く天下の人士に訴える

憂ふべき教育の實際

この事實を如何にみるか(文意按察)

とし、わが校の第一學年に入學の受験者八三〇名は、小學校の全教科の成績の満點を百點として百點を與へられて居た者は一三四人、九六點が一六八人、九八點が一三二人、九七點八三人、九六點六八人、六五點六〇人で、五八三人は九五點以上であつた。また席次でいへば大抵五、六番以上で十番以下は殆どない。

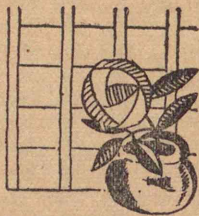
それらに課した筆記試問の中の「カタカナデ五十音圖ヲ書キナサイ」に正しく書きえた者は八三〇人の内一九四人、全體の二割三分にすぎず、又「ヒラガナでいろは四十八文字ヲ書キナサイ」に正しく書きえた者は一三一人、全體の一割六分たらずで、百人の内八四人は不合格でした。

そのほか算術、理科、國史などにかゝる事柄についても同様のうらみがあります。例へば算術なども殆ど加減法だけであるのに零點が五十七人もあつたのである。

優等生ぞろひの成績としては不足のものだと思ひます。この原因について私の考へでは、西洋各國はABCですむところを、平かな、片かな、その上に文漢字を學ぶことに努力せねばならぬからであらう。

今は、合理化の時代である、國民の義務教育には合理化が大切である。國語國字については、なるべく漢字をやめて、日本語をつかひ、できるだけ漢字をへらして、カナを用い、カナデカイは字音も國語も、發音式にしカナもひらがなをやめ、タカナにし、ついにはカタカナだけ用いて、發音通りにかく、これがわれらの主張であるが、かくて國民教育も信頼することのできる、確な成績をあげうる事と思はれる。

(東京府立第六 丸山氏)



讀方教育の檢討 (其の二)

愛甲・南毛利校 杉山 敏 美

「文章を読む」とは文字言葉のつながりを読むことであるが、文字言葉のつながりを読んで何を獲得するかと言へば、それは文字言葉の所有する内容であります。こゝに於て讀方の本質は、文章を読んでその内容を掴むことになつてくるのである。かう言ひますと先程の愚見と矛盾するかのやうに考へられるかも知れませんが、すこしも矛盾しないのであります。何となれば、文章教授の最高目的は、文を読んでその意味を取るより外にないと考へるからであるそこで誤解のないやうに少しく説明を加へるのであるが、内容を掴むと言ふことは、文章そのものの内容を掴むことであつて、文章外のはそれが如何に立派なものであつても讀方としては價值のないものであります。どこまでも

讀解の目標である文章の意味でなければならぬのであります。まずところが以前の奈良式讀方に於ては、こうした文章以外の内容を詮策する讀方教育が、かなり花々しく行はれて居たやうである。これは讀方の本質を明にしないとともに、内容といふ言葉の誤解から行はれたと思ふのであります。内容と言へば文章の表現形式と割然と分離し得る。と考へたが故に文章の内容とも離れ易く文章以外の地域を彷徨つたのである。これが内容主義讀方の脱線した本態であります。即ち讀方の仕事は文章を読んでその意味を掴むのであつて文章外の内容とは問題でないのである。どこまでも文章の意味は文字言葉の讀解によつて把握すべきものである。若し文字や言葉の讀解を経ないでその意味を把握し得る讀方があるとすれば、それはすでに讀方ではないので

あります。であるから文の意味を正確に取ることが出来ないとか、その意味をつかむのに困難を感じる場合には、その内容を注入して教へるべきでなく、その意味を、その内容を、正しく把握し得るだけの読解の指導をしなければならぬのであります。即ち読解の不能な文字言葉の詮策研究をしなければならぬので、内容を掴む前にその前衛であり、障壁である表現形式の吟味をしなければならぬのである。かうした文字言葉の研究をゆるがせにして内容ばかりを教へ込まうとしたので読解力のない文字力の低減した児童を多く造つてしまつたのである。そこで文章を読ませる場合には、内容を把ませるまへに文の形式の存在を認識させ、この形式を吟味することによつて正しい文の意味が把握し得るのだと言ふことを知らしめ、教師も、かうした見地より讀方指導の一步を踏み出すのでなければならぬと思ふのである。

であるから言語的、形式的方面に力を注ぐべきは當然すぎる程當然なことであつて、文字語句の充分な理解と研究なくしては、到底その主眼である一篇文章の意味を把えることは困難なことになるのである。たゞ徒らに直にその主力

である思想に突入しやうとするのは、水面の月を獲らうともかく猿よりも無暴であり、空虚なることであります。讀方教育に於ては、どこまでも文字言語の方面に充分なる根據を置かなければならないのである。

二

されど、この言語的、形式的方面の取扱も従前行はれた分離した一文字、一語句としての言語的、辭書的解釋にのみ終るならば、讀方教育は又死地に陥らなければならないのであります。唯いまのやうに、形式を尊重しなければならないと言ふことが叫ばれて來ると、批判に盲目である幾多の教育者は、讀方の本質はその形式の吟味にある。かくの如くに考へてその言語的、辭書的解釋にのみ専念しその本質であるべき文の意味、文の精神などは、埒外に投げ捨てゝかへり見なくなるのであります。これでは二十年前の讀方教育と寸分ちがはない死語の解釋、死んだ讀方教育となつてしまふのである。

一つの文字、一つの語句も一文中の一文字一語句として見る時にのみ生きた鮮血の流動してゐる語句として價値を有するのであります。例へば詩の一文字、一語句のやうに

—これはロシヤの文豪ツルゲネーフの言を待たないでも明なことである。

新興讀方は（奈良式讀方）この點に着眼して生きた讀方教育へと邁進したのであつたが、もろくも失敗に終りました。——けれ共われわれは、その長所は長所として認むるに賢明であり、寛大でなければならぬ。文字の意味は一つの語の意味と、一つの語の意味は一つの文節の意味と、一節の意味は一篇文章の意味と關聯してこそ、その文章独自の意味を表現するのであります。斯くのごとく文字語句の有機的關係の重視すべきを認め、文字の讀方からセンテンスの讀方にまで進歩せしめて來たのは確に新興讀方の失見であり功勞であつたと思ふのである。

三

また讀方に於ける鑑賞といふことも、新興讀方によつて興れる長所の一つであると思ふのである。鑑賞を表現上の玩味に止めずに深く文章創作の心理にまでは入つて、その心持を充分あちあはせやうとする鑑賞の見地は、修辭的、語法的、形式的、表面的の玩味と異り子供の感情に訴へてその共鳴共感を呼び起し、美の境地にしたらせるといふ本

質的の指導にまで進んだと思ふのであります。かくてこそ鑑賞は、佳句や美辭の詮義、作意的の技巧などから離れて眞に自己の總べてを投げ出してその境地にしたることになつたのである。

此の鑑賞といふことは、國民精神の陶冶でもあり廣くは人間的の陶冶としてなか／＼重大なものである。——讀方に於て自由に書き、自由に讀むといふ實用的の方面も勿論大切ではあるが、また讀方を味ふことによつて得らるゝ藝術的の陶冶即ち人間的の陶冶も極めて大切であります。國語讀本中の文學的教材による鑑賞から更に兒童の生活環境に至る種々なるものに至るまで、これを藝術的に鑑賞し得るやうにし、この落漠たる物質萬能の社會狀態の下に於て趣味ある生活をいとましましめるやうに導くことは、國民教育の上から國語教育の上からも、まことに重大なことであると思ふのである。

四

こゝに於て私は、内容と形式の一元的扱ひを主張するものである。この言葉たるや已に久しく言ひ古るされた言葉ではあるが、實際にはなか／＼一元的に行はれてゐないの

であります。文章を言語學的にのみ解釋することは勿論、表現上の意味以外の意味を詮策することも一元的なものではないのである。では一元的の取扱とは何か……と問ふならば、私は、其の文、其の語句について最も適切な解釋をほどこせ、と言ふより外にはないのであります。何となれば思想なり感情なりを形式の文字に表現するには唯ひとつの適切な言葉があるのみであるからである。(ポアロ・フローベル)であるから我々はその言葉のたゞ一つの適切な意味を取ればよいのであつて、他の脱線の意味づけや、字引的解釋をほどこすことは返つてその適当な形式を破壊するものであり。表現を冒瀆するものとして最も忌み嫌ふものであります。

五

以上わたくしは、わたくしの考へてゐる讀方教育について、その一端を述べたものであるが、わたくしは敢て新しき讀方を批難しやうとしたものではない。なんとすればその弊害が割合に大きかつたにせよ、又この新興讀方によつて得た點もなか／＼大なるものがあつたからであります。即ち從來の文字語句の讀方を改め、文を對象とする讀方に

まで進め、尙、さらに文の鑑賞にまで進んで兒童を藝術的心境に導き、讀方に於ける藝術的陶冶を唱導したのは新興讀方の先見であり、大なる功勞であるとおもふからであるところがこの新興讀方が、ほんの唱導されはじめただけで忽ち流行をきたし、そして又大風一過的に再び靜寂に歸つて一向に實蹟の上らなかつたばかりか、却つて幾多の弊害を生み、實蹟は不結果を來し眞剣な主張者の正しい意見をさえ世間からうたがはしめると言ふことになつたのであるこれは一に教育者が新説を、い合することにのみ汲々として、この學説を批判識別するの眼識を有せず、いたづらに流行の潮流に乗りて咆哮し、狂亂し、——或は又その概念のみを知るに過ぎざるに直にすべてに通ぜるが如く粧ひ、得々としてこのことに従ふからではあるまいか。まことに遺憾であり残念なことであると思ふのである。教育者たるものは今すこしく落ちつきを持つべきであります。そして自らの進むべき國語の大道を見つめ、型に捉はれず新思潮に迷はされず着々と堅實にその本道を歩むべきであります

(完)(七・三・七)



兒童の短歌俳句短評

愛甲・煤ヶ谷 杉 山 熙

私はこゝに、ありのまゝの子供の作品を通して駄評を綴つてみたと思つて筆を執りました。子供の世界は、色々の方面に於て大人の考へてゐる所とは大分異つて居ります。兒童の作品を見る場合にも、いつも自分の頭を子供の程度に迄引き下げて、かなり子供に近い立場から評價することが子供に親切なことであると思ひます。

次にあげました作品も、全くありのまゝの不完全な未熟なものであります。さうしてその不完全さと未熟味のある作品こそ、まことに子供らしい貴い價值のあるものであるといふ觀方は、いつも變らない私の立場であります。殊に短歌や俳句等に於ては、其の内容に於ても形式に於ても低い程度の要求を以てのぞまなければなりません。さうしてこの不完全のうちに少しづつでも、文藝上の趣味を培つて

行くことが出来るならば結構なことと思ひます。どうかこの駄評をお読み下さる方はそのお心持でお読み下さることをお願いしたいと存じます。尙作品はすべて尋六のものであります。

○こんどこそ食へると思つた菓子の箱また親類へ持つて行かれた。

お正月のお年始の感想を述べたものであります。お年玉に菓子の箱をいくつもいくつも貰つた。しかし少しも食ふことは出来ない。もらつたのも、もらつたのも、皆親類縁故の家へ年玉として持つていつてしまはれます。今度こそは食へると思つたが、またダメであつた。といふ如何にも子供らしい感想を赤裸々にのべたものであります。どこの家でもこうゆふことはよくやることではあります。が、たま

には他家からのお土産なども、家内中で開いてお茶を飲みながらいただくこともあつてほしいと思ひます。子供はその本能的満足を得ることによつて、どんなに喜ぶことでありませう。特にこの歌をよんで、この兒のためにさう思はせられたのであります。

○あて菓子で三等あてた妹は喜びにみちて母に見せるなり

小さい妹があて菓子をやつて、三等をあてた。さうして三等の菓子を小さい手に持つて、かあちゃん、かあちゃんといつて見せてゐる様子がありありと表現されてゐます。

○自動車がつて後にかけながら足もとみれば葉もかけるなり

面白い着想であり子供は子供らしい所に氣がつくものであります。大人には、一寸こうした子供らしい所には氣がつかないやうに思はれます。

自動車のおとをおつかけてみた。足もとを見ると木の葉も自動車の通つた後の風のために共にかけてゐるといふのである。木の葉も一所にかけてゐるといふ所をつかんだ點

藝的眞價の少ないことは申す迄ありません。

○犬ころはちやら／＼鈴をならかして、人來る度にじやれまはるかな

犬ころに對する親しみをのべたものであります。犬ころが可愛らしいとか親しいとかいふことは、形の上に何ら表はれてはゐませんが、作者のさうした感じが無言のうちに豊かに流れてゐる點がよいと思ひます。

○いつ見ても少しも休まずあせらない水車の如く我も勵まん

修養的の短歌であります。作者は修養といふやうな方面に頭の向いてゐる割合に、早熟な子供であります。子供のこうした作品はあんまりひきつけられる力は、強いものではありません。むしろ一番はじめのやうな、きざなむきだしの子供の本性のまゝの作品に強く引きつけられるものであります。併し作品はどこ迄も作者本位に觀てやらなければならぬので、この兒童として、この作品はもつともな次第であると思ふと共に、修養の着眼がまことに堅實であると思ふのであります。作者がこの歌の如くに實行が伴ふならばこの歌の力も強味があるわけになるのであります。

は何といつても満點であります。さうしてこの兒はそこに木の葉とびつたり融合した生活をして居るのであります。

こゝが貴い子供の世界でありまして、純真そのものであります。いゝ歌を作らうとして、大人がこしらへ上げたものなどは、比較にならないのであります。私は子供の世界に於ては、すべての方面に子供そのものの生活をそのまゝに伸ばしめたいと思つてゐます。それがやがては、子供の心性の陶冶になると思つてゐます。

○りんごをば買つてもらつて割つたらば中には虫が二三匹ゐたり

りんごを買つてもらつてさあ食べやうと思つて、割つてみたら、中に虫が二、三匹ゐたといふのであるが、この歌は虫がゐたがために、りんごが食べないとか、虫がゐてがっかりしたとかいふのではありません。よく讀んで味はつてみればわかる通り、この兒はやあ虫がゐた、虫がゐたといふことに非常な興味をかんじてゐるのであります。その單的な興味が表現された所にこの歌の生きた生命が宿つてゐると思ひます。文藝は決して、功利的なものでも虚飾的なものでもありません。眞情の吐露された作品でなければ文

○桑原で雀さえずる聲きいて、どんとどなれば、みな逃げるなり

これは簡単な日常の生活をのべたものであります。雀のさえずる聲をきいてどなつたといふのであるが、それは勉強の邪魔になる爲でも畑が荒される爲でもないやうです。全く面白半分の子供の生活の表現だと思はれます。さうしてどんと追つたらば、雀がみんな逃げ去つたといふ所に、興味を感じてゐるやうに思はれます。

○冬の夜の雪降りみだる大寒に犬の遠ぼえおつかないかな

冬の夜、雪降りみだる大寒とあまりに寒いといふことが重複して形式上から面白くありません。しかしまだごく初步のことであり、尋常科の兒童でありますから、この程度で結構と思ひます。雪降りみだる寒夜に犬の遠ぼえがきこえるといふもの恐ろしい情景をつかんだ所がよいと思ひます。おつかないかなといふ表現もあまりむきだしで、犬の遠吠へのするおそろしさ、さびしさがしんみりと感じられないが、それは餘程進んだ人に要求することで、この子供としては、やはりおつかないかなが子供らしくていいと思

ひます。

○庭先のぼつかり咲いた梅の花

ぼつかり咲いたといふ表現が面白いと思ひます。ぼつかりといふ言葉を味はつてみますと一つは氣候的に段々暖かくなつたやうな氣がしますし、尙一つには、不意に突然に咲いたとかいふ心持が含まれて、その二つが調和してゐるやうに感じられます。さうして句全體としての調子が初春の輕快な感じをただよはせてゐるやうに思はれます。

○梅の花ちらりほらりと咲き出した

ごく單純に初春の梅花の景をよんだものであります。梅の花もちらほらと咲き出したなあ、初春だなあ、といふ感じが輕快に流れてゐるやうに思はれます。

○春近しうぐひすの聲もほがかなり

うぐひすの聲ものんびりと快くなつてきた。もう初春である。春になるんだなあといふ情感が溢れてゐるやうに思はれます。

○外は、吹雪家ではこたつ

所謂新傾向の形式で作つたものであります。外は寒い吹

雪である。家の中ではみんなで靜かにこたつにあたりながら睦しく語り合つてでもゐるやうに思はれます。そこになんとなき靜かさが流れてゐるやうに感じられます。

○暗やみに眞白な雲がちらちら

まつ暗な夜である。雨戸をあけて外を見ると、外には雪がちらちらふつてゐる。おゝ寒い。雪だ、雪だといつて雨戸の間から外の暗い景色に見入つてゐる様子が見え、しんとした無言の雪の夜の情景が目の前に見えるやうです。

○白煙空一ぱいのくす葉もし

場所は庭であつても、山裾であつてもどこでもいい。くす葉をいばいとかき集めて來て、二、三人でもしてあたつてゐるのであります。白煙はもうくすと勢よく空に立ちあがつてゐる情景で何となき悠閑さを思はせられるやうであります。

○妹は猫と遊んできげんよい

何と無邪氣な作でせう。作者は全くその境地になりきつてゐます。小さい妹と猫とのたはむれ、その親しみ、それ

を觀照してゐる作者、これが純なる子供の世界であります。そこには名譽も損得もないのであります。吾々も少しでもいゝからこゝにいふ純なる童心に生きたいと思ひます。

○猫の目が細い初春の暖い日なり

實際よくある情景であります。初春の暖かい陽光に日向ぼつこをしながら、猫が目を細めてぬくとまつてゐる。平和な靜かな初春の感じをよんだもので形式は新傾向の形をとつてゐます。

○柿の木で蟬なき止んで夕焼す

この句は靜寂な境地をつかみ得てゐるやうに思はれます。やかましい蟬のなき聲も止んで靜かな夏の夕方が訪れてきたその時西の空からほんのりと夕焼が照らしてゐるといふので、そこに一抹の靜寂味を味はせられます。

○古とよのえみの間より水がぼちや／＼

うす暗い清水の出でゐる澤のやうな所に古いとよがかゝつてゐて、そのとよももう古くなつて黒みが／＼つて青い苔でも生えてゐさうであります。さうして古くなつてもうえ

んでゐるので、そのえみ間から水がぼちや／＼こぼれおちてゐるといふ所であります。

○お正月よい下駄はいてこままはし

子供らしい生活をありのまゝによんだものであります。技功も何もありません。單純なものでありますが新しい下駄をはいて、喜びながらこままはしをしてゐるのどかなお正月氣分が味はれます。

○北風に木立は寒くゆれるなり

北風が吹いて葉もなくなつた裸體の木立が寒さうにゆれてゐるといふ簡單な冬の描寫であります。よくまとまつてゐることゝ、寒いひつそりした冬の感じがよくでゝゐるやうに思はれます。(終)

昭和七・二・一六





綴方生活内容の 指導に就いての一考察

上郡・山田校 栗 原 政 男

○
現今の教育思潮は兒童中心—新教育—と教師中心—舊教育—との二つが相對立してゐるのではないかと思ふ。所謂以前は教師中心主義であつて、同一的機械的注入的—教師の專制に依る—方法が行はれてゐたやうであるが、今日では兒童中心主義即新教育に依つて行はれてゐるやうである。

然し乍ら教育即生活が提唱され實現されてゐる現今にありては當然であり、之に伴つて生活指導といふことが生れてこなければならぬと思ふ。

此の生活指導なるものが全教科指導の重要問題として教育社會に登場し、喧噪なる議論が近來の教育者たちに依つ

て高調されて來た。それと同時に綴方教育にも生活指導なるものが新鮮なる芳香を放つて出現し教育チャーナリストたちの偉大なる憧憬の的となつて教育社會を横行してゐる然し口に生活指導を唱へ、筆に生活指導と書きながら現實の教育生活にどれ程理解と認識を有つてゐるか甚だ疑はしいものである。若し私の觀察が幸に誤つてゐるべくば我が綴方界にとつて之程幸福なことはない。

生活と云ふものは生活自身絶對唯一のものであつて、各教科に於て別々に考察され指導さるべきものではないが、各教科自身の本質から考へるならば、各教科に對しての生活があるべき筈である。

靴を提げて一度も校門をくぐつたことのない子供たち—

小學校入學以前—の生活は漠然とした習性的生活である教育は此の習性的生活に文化的價值意識を指導して、全人への向上を圖るのである。従つて修身教育にありては、この漠然とした習性的生活に對して道德的意識の發見を求めらるものである。こゝに修身科の生活指導が生れて來るのである。

斯くの如く、生活は自身絶對唯一のものであるが、各科指導導上の立場からは各々獨特の本質の上に立つ生活指導がなくしてはならない。讀方には讀方的生活が、國史には國史的生活が、地理には地理的生活等がある故、夫々の生活指導がある筈である。

然して、各科が相合し相扶けての生活の具體的發展を圖らなければならない。

従つて綴方に於てもかうした教育的全野からの生活陶冶と、綴方獨特の銳角的生活指導が當然過ぎる程出現しなければならぬ。

○
「人」の生活を全體として眺むるとき、それは渾然として一つの生きた有機的存在であつて、切り放してしまへば

もう死んだ物質となつてしまふ。此の生きた人生全圓の生活を稱して人間生活と云ふのである。綴方に於ける生活内容の指導とは兒童の人生全圓の生活、兒童の自己生活のあらゆる内容に、人間らしさを見出させつゝ生長せしめて行く事を意味するものである。

本誌二百七拾九號に於て杉山縣氏は「綴方に於ける表現は何處までも自分に對して真か偽かと云ふ點に就いて評價されなければならない。其の文が形の上で如何に美しく立派に調つて居ても其の文の内容に眞實味が欠けて居たり、輕薄な内容であつたりしては何等文の生命はなくなるのである。其の表現の手練はよし拙くとも眞實味の溢れて居る文、内容の豊かな文であるならば立派に生きた生命を持つ文であるべきである。亦實際に於ては眞實味のこもつて居る場合、内容充實して居る場合には自然に立派な表現が出来るものであり、眞實味に乏しく内容淺薄であつては立派な文章は出来ない事は云ふまでもない」。以下略と說かれてゐる。實に眞實味に溢れてゐる文、内容充實してゐる文であるならば、兒童—兒童に限らず大人でも—の個性が現れ生きた生命を有する文となるのである。

然らば眞實味の溢れてゐる文、内容の充實してゐる文は何處から生れて來るべきかを考へて見たい。「火の無い處に煙は立たぬ。此の古語に依つて萬事は盡きて居ると思ふ。生活内容の無き處に、貧弱なる處に、生きた眞實味のあつて、内容豊富なる文の生るべき筈が無い。「文は人なり」の誰かの言葉も此處ではつきりうなづかれる。そこで當然起るべきは生活内容の指導であると思ふ。

○

綴る以前に於ける生活内容の指導として、綴る内容を深めるとか、豊富にするとか云ふことに立脚して考ふる時は其處に種々な方法があると思ふ。それを私は

- 1 先天的に素質を有するもの……遺傳
- 2 環境より來るもの……環境
- 3 讀書、話をきく、觀る等の學習又は訓練に依るもの……訓練

との方面があると思ふ。

素質所謂遺傳は私たちの如何ともすることの出來ない先天的に限定されたものである。故に論ずる必要はない。私たちのなし得る方法は環境の整理と訓練の外はない。

○

兒童の環境としては、家庭あり學校あり、社會あり、自然等がある。先づ家庭生活に於ては父母、兄弟、姉妹其の他の人々と共に交渉しつゝある。其の交渉に於て生活に於て無關心であつてはならないのである。

然し乍ら何等此の指導なき兒童は内省すべき、觀照すべき、綜合すべき場合にありながらぼんやりとしてゐるのである。ぼんやりしてゐるのを其のまゝ放りつばなしにして居たのでは、決して彼等の自己は成長すべきものではない其處で何等かの注意を拂ふべき態度、内省する態度を指導して行かなくてはならない。指導して行くことは、綴方の内容を深く、且つ廣くする所以である。

學校生活も亦、質量的にみて家庭生活に次ぐものである此處には學友との交渉教師との交渉、學習中の諸事相が横たはつてゐる。之が生活内容となる故に家庭生活と同様に生活のうちに於て内省し觀照し綜合する所の生活態度を指導すべきものである。

社會生活。登校の際、其の他村の道——田舎に例をとるが町にありては町の道——を歩いてゐる時、其處には綴方

の題がごろ／＼してゐる。ぼんやりとしてゐると見逃してしまふ。其處に注意して眼を向けて眼の鏡にうつたなら考へてみて題材とさせるやう指導しなくてはならない。其

の他新聞に於ける三面記事の如きは、社會の縮圖である故にぼんやり讀む丈では濟まされないであらう。批判をなす様な生活態度はやがての國民として重要な所である。所謂小さいながらも社會眼を開かせてやらなければならないと思ふ。

自然界と兒童の生活との交渉は、環境の中に於て最も場面の廣い意義の深いものであらうと思ふ。従つて、自然界に題材を求めて綴る態度を養つて行かなければならない。自然界と云つたからとて必ずしもあたりの景色とかを要求するものではない。家庭生活の中にも學校生活の中にも、社會生活の中にも、自然界との交渉はある。況して田舎の兒童には豊富にあると思ふ。

之等の指導は、文話の際に一般的に行ふ場合もあり、又個人個人に即して時に關せず行ふ場合もある。然して其の態度の指導から綴方は生れて來るものである故、之は綴る以前の指導であると云ひ得る。

○

環境に於ける生活の次に最も直接的に兒童が綴方の内容として取り入れるものは、讀むことの生活、きくことの生活であると思ふ。

話をきかせる機會を多く作つてやること、讀書を多くさせること等は或意味に於て環境に於ける生活内容の指導以上直接に綴る力を伸すものであると思ふ。

話をきく場合は、學校でも、家庭でも、かなり多い。之等をぼんやりきいてゐてはいけないと思ふ。靜かによくきく態度を養つておかなくてはならない。之がすぐ兒童の生活内容となるからである。但し考へなければならぬのは學校に於ては餘り多く見受けられないが、家庭に於て非教育的なる話をする場合は之を避けしむるやうに注意せねばならない。非教育的とは私が此處で今更云ふ必要はないと思ふ。従つて、學校と家庭との聯絡が重要となつて來るものである。尙みること映畫の如きものも教育的であるならば事情の許す限り私は奨励していゝだらうと思ふ。

讀書慾を増してやつて多く讀書せしめることは、唯單に綴方の内容を深くし廣くするのみにとゞまらず、之に依つ

て綴るべき材料の暗示もされるであらうし、又如何にして書き表はすかと云ふが如き表現的方面にも甚大なる暗示を與へ、然して讀んでゐる間に自然に文字、語句の收得もする故、形式的方面にも多大の資料を得ることが出来る。所謂讀書は綴方に對して凡ての方面を伸展せしむべき偉大な力となるものである。然し乍ら之が選擇に當つて私たちが大いに困却する。それは程度、趣味品、内容、形式等の諸方面から考へてある。最も此の仕事はそれを讀んで内容を理解するとか、味はふとか、鑑賞すると云ふ生活であつて讀方の生活と見てもよい。然してそれが兒童の生活内容となる。直ちに其の時から既に綴方の生活となつてしまふのである。

○
兒童の生活内容を唯豊富にするだけでは之また全人への向上は圖られないわけであつて、豊富にすると同時に自己を明らかに見出さなくてはならない。其處に自己をじつと見つめなくてはならない。若しさうでないとするならば、價値あるそしてより深き自己を創造することにはならない故に深まりつゝある自己であるならば、綴方的環境も綴方

的訓練も兒童をして生活内容を豊富にしてくれるのである。従つて、環境を見つめると云ふことは自己を見つめるところであり、訓練又は學習に深く入ると云ふことは自己に深く入ると云ふことになるのである。

○
具體的に云ふならば兒童の生活経験のあらゆる中にそれ等を省察し内省し、綜合しながら生活して行つてこそ、始めて自己を深めると云ふことになるのであると思ふ。

成績處理は云ふまでもなく、兒童の表現の處現であつて其の目指す所は、其の表現を通して生活内容及び表現形式の指導を行ふにある。所謂綴つた後の指導は綴方指導に於て重大なる使命を有するものである。指導者の成績處理の態度如何は、兒童の綴方に對する興味も、趣味も、自覺も努力も、凡て影響するものである。私は成績を通しての生活内容の指導に際してどうしてもなさねばならないのは閱讀であると思ふ。

閱讀に依つて

- (1) 各兒童の生活内容を知る
 - (2) 各兒童の表現形式を知る
 - (3) 以上12の傾向を知る
- 個別指導が生れる。

(4) 學級全般に對する批評材料及び鑑賞材料を發見する。

かくして生活内容の指導が行はれるのである。表現上の指導も生活内容の指導も閱讀なくしては到底なし得ないのである。

○ 此の頃の世の中 尋六女

此の頃の世の中の人々は皆一様に

「不景氣々々々」

と、さはいてゐる。此の間東京の兄さんからの手紙に依ると、

「今東京の所々の公園などには失業者がゴロゴロとねてゐる。仕事などに雇はふとしても御飯をろくに食べてゐない爲に、仕事と思ふやうに出来ないでよさせられてしまふ。」と言ふことである。

けれど私は大勢の人が食ふに食はれないといふ情ないことは、皆其の人たちの心がけが悪いからであると思ふ。少くとも社會に出て仕事が無くなるなどは以つての外會社につとめてゐるとしても、その仕事に精を出してゐ

れば首などを切られる恐れはないと思ふ。百姓も同じくさうである。物價が下り出金が多い爲、

「不景氣々々々」

と泣きつらを下げて

「政府がどうのかうの」

と働くことを忘れて言ふ人を見受ける。だがやはりその人も悪い。

働くことを忘れ質素を忘れて色々の寢言を言ふ。

不景氣は不景氣である。不景氣を恐れず、仕事に精出し質素を旨とし、家庭の平和を守り自分で不景氣を防がなければならぬ。

不景氣は人々によつて征服しなければならぬ。(終)

○
此の文は私の受持つてゐる兒童の作である。此の文のみでの此の兒童の傾向はわからないけれども、此の作者はかうした傾向のある文をいつも書いてゐる。その欠陥長所は——表現上——あるには相違ないが、私は今表現形式に就いて云々するのでない故之は後の仕事として此處では略し此の文に就き此の兒童の生活内容を探つてみたいと思ふ。

現代の社會世相に對して批判を加へたものであることは、閱讀してすぐわかる。かくの如き文は社會と兒童の生活交渉に就いての暗示か何かに依つて生れたものであると思ふ。出京してゐる兄からの頼りを中心に家庭に現代の世相に就いての談話が起り、それにヒントを得て表現するに至つたものと推定出来る。

然し作者はルンペン級の悲惨な生活に對して何等同情と云ふが如き心情を起してゐない。

唯頭から心掛けが云々と批難してゐる。此處に生活内容の指導の必要が生れて來るのではないかと考へる。批難することゝそれは或程度まであつて作者の如き批難は一概に出來ない。失業者が仕事もせずと云ふことは作者の觀察も一方法であらう。然し仕事が實際にない場合もある。かゝる時作者の如き批難は彼等失業者たちに對して無同情すぎる。こゝに於て同情心を起すやうな生活態度を養つて行きたいと思ふ。かゝる批判の加へ方では彼等兒童の生活内容は廣くなるかも知れないが、深くなると云ふことは到底云ひ得ない。今少し適當なる批判を加へしめるやうに、暗示なり、注意なり參考なりを與へてやるならば、

それが彼等兒童の生活内容の指導となるのであると思ふ。

具體的に申すならば、作品の最後に「心掛けが悪い」之だけ思つて他に何にも思はなかつたか。今少しよく考へてみなさい。と、云ふやうな簡單な批評を加へて——勿論形式方面も加へる——返します。さうして推敲せしめて再び之を提出させるならば、今少し深入りした兒童の生活が表はれます。

私はかくの如くして表現を通しての生活指導をしてゐる。

○
勿論之で萬事至れり盡せりとはしない。經驗に乏しい淺薄な私のする所である故、先輩諸氏の御指導を仰ぐと共に尙此の他實際に兒童に當つての悩みは幾多もある。其の悩みは今後の仕事として、又は問題として此の稿を結びたいと思ふ。(終) (一九三二・一二・一〇)



綴方教育私見

—— 生活指導に就いて ——

下郡・湯本校 市川 一 夫

生活指導……此の四字は少くとも綴方を論じ、綴方を指導する者の必ず口にしなければならぬ言葉である。著名な綴方教育家達の著書に生活指導の項目なきものは殆んど無い。私も亦此の生活指導に關心を有する者の一人である。生活指導——一體生活の何を指導するのか。曰く、生命の純化に努める。曰く、生活を尊重する態度を培ふ。曰く、生活を豊にする。曰く、觀照の生活へ、曰く、生活を意識せしめる。曰く、價値の生活へ

曰く、我に目ざめた生活の導き……

まだ挙げれば幾らでもあるだらうが……

いづれを聞いても誠に御尤な話である。實際家である我々は何れも採つて範としなければならぬ。

私は生活指導に對する此等の數多き所論を今靜に考へて

見たい。

生活を指導する。惟へば惟ふほど意いよいよ深きを覺ゆる。素朴な土にまみれた兒童の生活を淨め、生活を豊にする。何としても必要である。その生活がすべて文になる様な生活まで昂める。私達の夢寢の間も頭を離るるを許さぬことである。

かかる理想——勝れたるよき生活指導理論を持つ人達は然らば、如何に此の生活を指導しつつあるか、私達は如何にして此の指導理論を具體化すべきか。

かく立論する人達は一體どこで、こうしたことを提唱するのか、多くは學校の職員室の一隅であり、自己の研究室であり、書齋である。兒童から遙にはなれてかく提唱さる著書の結論の終末を見るとよく分る。

……の静なる郊外にて 曰く、白浪の音微に聞ゆる……の偶居にて……とある。

生活指導。言ふだけなら何でも言へる。要は如何にして理論を實行するかにある。

児童に知識を吸収させるだけでは生活は豊にならない。見聞を念入りにやらしたところで生活は極められない。

私は斯く獨斷する。斯うして生活指導論を生産する時間があつたら、児童と共に生活することに轉換せよ……と児童の生活指導は児童をはなれて出来るものではない。教室で児童に向ひ、

深く視つめろ、

廣く考へて見なさい、外のものと比較して、ちがつたところを發見するんですよ。

と、大聲叱呼して、後は教員室に書物と首びきになつてゐたのでは駄目だ。生活指導は児童と交渉してゐる現在にこそ求め得らるのである。児童と共に語り、児童と共に躍りまはり児童と共に歌ひ、児童と共に歩くところに、生活の指導はなされて行く、生活を正しく視る態度が培はれて行くのでは無からうか。

生活指導は要するに教師が児童と共に生活して行くその裡に無限に存在するのである。

X X

共に生活することを考へない。生活指導論者であり、綴方教育家達はその具體化の一として、題材帳を児童に持たせる、教室の後には題材一覽表を嚴然として掲示し、題材の發見記入競争をやらしてゐる。児童は本質的に優越感を多分に持つ、之は児童心理學の説明を聞くまでもない。従つて児童は少い題材より多い。題材の掲載に向つて狂奔する。教師は亦題材をぎつしり掲載してある児童を紹介して

××さんはこんなにたくさん題があります。……深く視つめてゐるしよこです。

と賞揚する。教師に賞められることを知事閣下に賞められるより名譽に思ふ子供達だ、あとは言はないでも分る。

題材帳には 題材の

一、發見の場所

二、何時

三、そこにだれがゐた

四、どんなことがあつたか

1 2 3 4 5 ……

五、どうなつた

六、まはりの様子

等等々

巡查の實地檢證の記録の様なものをかかせて得得としてゐる向もある。成程斯うすれば誠に題材は豊である。それだけ要項が記載してあれば綴方の時間には題材にだけは困らないであらう。

そこで教師は

「さあ題材帳から擇んで何でも好きなものを思ふままにかきなさい。」

とやる。そして児童達がかいてゐる(……文をかいてゐる児童は極めて少い……)姿を教卓から默然として眺めてゐるだけである。或ひは腕ぐみしながら机間巡視を行ひ、時々無意味な干渉をやらかす、これが生活指導の題材帳發展形式の綴方指導である。

かかる教師の下に指導さるる児童こそわざわざゐる哉だと私は斯く考へる。こうした題材帳尊重の綴方指導もある意味に於て必要ではあるが、全面的な價値を有するものではない、時間中に於ける教師の無指導は恐るべきものである

つて生活尊重ではない。

題材帳に一ぱいかかせてそれをたよりに児童にかかせるより、教師は児童の綴ることに參與しなければならぬ。

否児童の綴ることに元氣づけ勵ましてやるべきである。それには児童をして綴らうとする題材を教師の膝下まで發表せしめるのである。

×先生、僕、みかんもぎです。

○何？ みかんもぎ、うむ、いい題材だな、こいつはいい題だぞ、きつとうまくかけるぞ、さあかいて見ろ——後でみんなに讀んでやらうかな……

こうしてやれば児童は勇躍自己の席にかへつて、綴らんとする。そこで

○君——君の家の前にはうんとみかん箱がつんであつたが、君のもいだみかんもあの中にあつたんだね。

×はい

○どれ位君はもいだい。君は何でも一生懸命やるから、きつとうんともいだらう、兄さいなんか負かしてしまつたらう。

×先生僕ね、昨日なんか、學校から歸つて七〇〇位もい

だの。

「そうか、やつぱり君は大したもんだ。そう云ふところをうんとかこうぜ」

そこで児童は喜んで自己の机に還つて綴るのである。綴らむとする児童の努力はこうすることに依つて泉の如く湧いて行く。

題材帳に記した豊富な題材、それはどこまでも豊富な題材だけに止まり、決して綴らむとする努力は生れて来ないのである。私達はこの題材帳を勿論拒否するものではない。それよりもつとつと児童の綴らむとする努力を培はねばならないのである。文の芽を育くまなければならぬのである。

次の一文は私の、綴ることに參與して生れたものである。題材帳などには勿論依つたのではない。參與と言つても唯題材開拓に止る。

うれしき日

尋 四 島 房 子

私は學校へ行くと「いやだわ、こんなくつ」と思ふのでした。私のくつは男のはくゴムぐつだったのです。

一番はじめはいて學校に行つた日、男生は皆して

「島は男のくつはいてらえ」

とあざけるのでした。私はその度ごとにばかしくなりました。或日のことです。夕飯の時お父さんは私に

「房子、今日は明神市だから遊びに行つてついでにおまへのくつも買つてこようよ」

とおつしやつた。うれし！ 私は心の中で思はずきんだ。

夕飯をすまして「ああ行こう」とおつしやつたので私はすぐしたくを始めた。頭をゆつたり洋服を着たりしてやつとしたくが出来た。

お父さんと私は家を出た。「おー寒い」私は思はずつぶやいた。けれどくつを買に行くと思へば自然と足どりが軽くなつてくるのでした。私がゴミ焼場のそばまで来たのに、まだお父さんは橋を渡りきれないので。やつと追ひついて「早いね、房子は」とおつしやつた。

お父さんの足音は大またでスタ、スタ、スタ……………

私の足音は小またでチヨコ、チヨコ、チヨコ……………

やつと停留場についた。私は電車を待つのも、もどかしく思つた。

その時はもう八時を過ぎてゐたので電車は二十分毎に来るのだつた。十分位待つてやつと電車は来た。あんまりうれしのでとび乗つたお父さんは電車に乗つてゐねむりをしてゐらつしやる。私はゐねむりどころのさわざではなかつた。今度買ふくつの形のことを一生けんめんでさうぞうしてゐた。鶴岡さんと同じ形だといふけど」お父さんは相かはらずゐねむりをしてゐらつしやる。ゆり起したらやつとお起きになつた。

んは

「うん、房子は早く、くつ買はないと、承知しないんだねえ」

と云ひながら幸町の停留場に向つた。

間もなく電車が来た。見るとそれには一ぱい人が乗つてゐたので私達は一番後のしやしやうさんのところに立つてゐた。

私の頭の中はくつ、くつ……………形は鶴岡さんと同じの……………二つのねがひがぐるぐるまはつてゐる。

私がぼんやり考へこんでゐたら、いつの間にか箱根口だつた。ふりむいてお父さんの方を見ると、お父さんはにこにこして「さあ房子、来たよ下りなさい」とおつしやつた。電車を下りるとすぐそこには下駄屋そのとなりは八百屋、下駄の向つて右には廣い道がありました。その横がかさ屋、くつ屋となつてゐる。私はきつとここで買ふのだらうと思つてゐたら、八百屋のつきあたりの家だつた。今まで氣がつかなかつたが、くつ屋があつた。お父さんと私はくつ屋に入つて行つた。そこには番頭がすわつて本をよんでゐた。

「ごめん下さい」「あ、ゐらつしやいませ」

「この子のはく位のくつを一つくれませんか」

お父さんは私をさしながらおつしやつた。番頭さんは本をおいて、たなからいくつも箱をもつて来た。そのそばの臺の上には長ぐつ、うんどうぐつ、大人のかはぐつなどがおいてあります。しばらくそれに見とれてゐましたが、ふと氣がついて番頭さんがふたをあけながら「これは三圓五十銭」と、とり上げたくつを見ると一寸鶴岡さんのにゐるので私は心の中では「これを買つてくれればいけど」と虫のいいことを考へてゐた。

番頭さんはそんなことは知らずに「これはごく上等なので四圓四

「お父さんどこで下りんの」

「幸町で下りよう」

とおつしやつたまま又ねてしまつた。つまらないので電車の中を見たり窓の外を見たりしてました。夜はもうおそいので電車の中にはおばあさんともう一人まるまげにゆつた女の人の二人しか乗つてゐなかつた。

「幸町本社前、お下りの方はございせんか」と、とつぜんしやしやうのこゑ……………私は急いでお父さんをゆり起した。電車を下りるともうそこには人が一ぱいになつてゐました。一番先には花屋、菓子屋です。そのあとにつづいて反物屋です。足袋、肩かけ、帽子などがかさられてあります。菓子屋、酒屋などたくさん出てゐます。

けれど私はそれよりくつ買ふことばかり考へてゐたので、何もほしとは思ひませんでした。向ふでは人が一ぱいたかつて、その中でひげむちやの男の人がどう巻をたいたりならべたりして賣つてゐます。お父さんはそのそばに近よつて見てゐました。

ひげむちやの人はこゑをはり上げて

「このどう巻はねる時にすると、ねびえもしないでねだんは、わづか十銭」と口からつばをとばして、顔からは汗をだくだく出してゐる。それがいかにも苦しうなので見てゐる私は氣の毒でたまらなかつた。それがすむとはをりのひもを賣つてゐる所に行つた。

「はをりのひもを下さい」

「へえ十五銭のと十銭のがあります」

「十五銭のをもらひませう」とお父さんは十五銭のはをりのひもを買つた。私はお父さんのそでを引つぱつて

「お父さん早くくつ買に行こうよう」とさいそくしました。お父さ

十六銭ですが、ねぎつて四圓三十六銭にしておきませうと一生けんめいでお父さんにせつめいしてゐる。私はさつき明神市でどうまきを賣つてゐた人を思ひ出して、おかしくてたまらなかつた。すると幸にお父さんは私の思つてゐたくつを買ひました。

私はとび上るほどうれしかつた。ほんとにうれしくつて、うれしくつてたまらなかつた。番頭さんはそのくつをきれいな箱に入れて新聞紙につつんでお父さんに渡しました。お父さんはそこにお金をおいて店を出た。

もう十時か十時半頃なのでせう。店もそろそろ戸じまりをしたりにもつをはこんだりして家家は皆ひつそりしてゐる。ある家のかげで今買つたくつをはいて、今まではいてきたくつをその中にしまつた。箱根口のすぐそばの下駄屋の光でくつを見たらピカピカ光つてゐた。お父さんはだまつたまままだこをすつていらつしやる。

約十五分位待つたら電車が來た。中には十二、三人、人が乗つてゐた。私は時々自分の足を上げてくつを見た。相かはらず光つてゐるそれが又電とうにあつてなほ一そう光つて見える。いつのまにか目がかつたてのくつでうつら、うつらぬむりをしてしまつた。ゆり起されて目がさめるといつの間にか三枚橋に着いてゐた。下りると寒い風が私のほほをなでて行く……突然お父さんが「房子、くつ買つてもらつてうれし」とおつしやつた。口ではだまつて居たけれど心の中では「お父さんもう私はうれしくつてうれしくて、むねがはちきれそうだわ」と言つた。そして感謝の心で私はお父さまに何と言つてよいかわからなかつた。房子、お父さんはお前が一生けんめい働きたへすればお前のほしいさつしでも何でも買つて上げるよ」お父さんはここにこしながらおつしやつた。橋を渡りながら下を見ると川はおどそかに流れて行く。

家にかへると、すぐねまきに着かへてふとんとつた。お父さんはいつのまにか高いいびきをかきながらおやすみになつてしまつた

ねる前にもう一べんくつを見て床についた。明日ははいて行かれることを思ふとうれしくつてねられないのです。學校へ行つても明日からは

「島は男のくつをはいてらエー」などと男生から云はれることなんかあるまいと思つた。

たのしき夜……

かはぐつ……

うれしき日……

私は安らかにれた。ゆめうつつタン、タン、タン……十二時のなるのを聞きつつ。

長文は何と言つてもその兒童の思想の深さ及び廣さを表す。二、三行の鋭い觀察をならべた自由詩を「天才の関だ」などと得意然としてゐるのを私はとりたくない。如何なる事物現象をも描寫叙事する力を與へる者こそ、最もよき綴方指導者ではあるまいか。

生活指導の生活の擴充生命の純化は、教師があまりにも兒童を藝術的生活に導かむとするものではあるまいか。生活のあふれた文と言ひながら、土の香の薫高き文と言ひながら、兒童に藝術的表現を強要する綴方教育家が現在には如何に多くあることとらう。

前掲「うれしき日」は勿論欠點のないものではない。今流行の綺方教育家達から見ればかなりの非難があらう。が然し私は此の文を敢然として、最もよき文であると推すものである。本文ににじむ生活の實相そのものの本文を讀みて脈々として迫る強き力を感じるのである。生活を正しく視させる。私の綴方教育に於ける生活指導の第一義である。

詩文の綜合的指導論

足柄下・宮城野校

加

藤

正



一、本論提唱の理由

俳句、短歌、自由詩……かうしたものを私はまとめて詩文といふ言葉であらして散文と區別してゐるが、小學校の綴方科として、この詩文の取扱ひの適否は可成問題視され今に於ても否定論者は、元來詩作等といふことは一種の天性である故、若し之を正課として扱ふならば、そこに大きな難點がありはしまいか等と稱して懸念もされてゐるが、私は綴方科といふ學科が、自己の思想、感情を自己の文字文章を以て表現すべきものであるとするならば、かうしたものの形式についても一通りの指導をして、その表現法を知らせておくことは絶対に必要なことであると考へ、又それが教師としての任務であるやうに思つてゐるのである私は以上の意味を以て詩文の指導の必要なるべきことを

主張するが、現在實際上の問題としてこの詩文が如何に取扱はれてゐるかといふに、詩文と稱するものの中の自由詩短歌、俳句等は各々單獨に、いはばきれぎれに課せられてゐはしまいかと思ふのである。勿論この三の形式には、それぞれ異つた獨自の立場があることはいふまでもないことである。例へばいつかの國語教育の詩上に次の如く短歌と俳句の相違について明確に示されたものがあつたので参考までに擧げてみる。「元來短歌は感情動亂の間に生れ、俳句は感情の動亂を通りこした靜觀に入つて生れるので、短歌は主觀詩となり、俳句は客觀詩となるのである。短歌に於ても花鳥風月を歌ひ客觀的叙景の詠もみられるが、之は決して靜觀的態度に於ての所産ではなくして感情動亂の心的狀態に於ける感激そのものである。又俳句に於てたとへ

人事を歌つてゐるやうにみえるものでも、それは人事そのものではなくして自然の一部としての人事であり、動亂的感激から生れてゐるものではなくして、靜觀的態度に於て自然に投入された人事として歌つてゐるのである。……」又自由詩は如何かといふに、之にはその名稱にも、分類にも随分やかましい議論もあらうが、生田春月氏の著書だつたと思ふが、それに今の新しい詩（自由詩）のはじめには萬葉の長歌や今様などと同じ舊來の音數律の制約を採用した故、一面からみれば短歌に壓倒されて一時減びてゐた長歌の復興ともみることが出来るといふ意味のことがある以上のことを考へると、俳句、短歌、自由詩のそれぞれの立場はうなづかれるのである。然し私はその根源に於てはこの三者は皆所謂詩としての本質の點に於て一致してゐるものと信じて小學校としてはその點を念頭に於てこの方面の指導に當るべきであると思ふのである。

百田宗治氏の詩の鑑賞のはじめに「日本詩歌の系統は、記紀にみえる古代の原始的民謡にその端を發し、奈良朝の短歌、施頭歌、長歌に及んで、音律上及び定型詩としての基礎が整ひ、次いで、連歌、俳諧（連俳）俳句といふやう

に時代と共に次第にあたらしい形式を營んできたのであるが、明治の初に起つた新體詩は系統的にいへば、むしろ今様の形式を踏んだもので、それに西洋詩歌の影響を受けて出来上つたのが今日の詩（又は自由詩）と稱するものの直接の淵源となつてゐる」とあるが見様によつては、之は詩文の系統を述べられたものと思へる。即ち日本の詩文の根元は古代の原始的民謡にその端を發してゐるものと考へられ、その發達の段階に於ても三者並立したものではなく、一より分裂したる經路をとつたものとみることが出来る。

尙窪田空穂氏はその著書に「歌は我々の實生活の上で持たざるを得ない、單純な喜怒哀樂の情を何等の思慮分別も加へず、單純に表現するものです。更にいへば我々の生活の生地のみを表現するものです。之が歌の精神です。」とて短歌につき、又俳人森川許六は「世上の人が俳句を案ずるのに皆題號の中から案ずる。之はよろしくない。若し餘所より求め來らば無盡藏であらう。たとへば題を箱に入れおき、その箱の蓋の上に立ちあがり、乾坤を廣く求め尋ねる。されば幾らも趣向はあつて、案じ出すことが出来る。若し題にのみ拘泥してゐるなら新らしいことはない。たま

たま新らしいやうなものがあつても、それも誰かに言古されてゐるに相違ない。」とて俳句につき、又詩聖ゲーテは、「私が詩を作つたのではない。詩が私を作つたのである」と稱してゐるが、之等は皆、短歌、俳句、自由詩のそれぞれの本質の究明で、その作られる刹那の様を説いたものでここに至れば三者皆一の状態で、シルレルの「詩は靈感である」と稱した語につきるのではなからうかと私は思つてゐるのである。

以上述べた點に於て、それぞれ形式を異にした詩文もそのよつてもつて來る心は同一のもので著しく強調せられたる思想、感情が感動として、生田春月氏の言つて居られるが如く、微風のそよぎの様に軟く、嘆息の如く軽く、泉のやうに爽かに自らわいてくるもので、その素材と之に對する心、及びその中からなる雰圍氣によつて、或は俳句に、或は短歌に、或は自由詩にあらはれるものではなからうかと考へてゐる。

さらば綴方科に於て俳句も短歌も自由詩も一通りは小學校として教ふべき理由は前にあげた如くである以上、之等の詩文指導にあつては一度は必らずこの三者綜合の指導

に至らなければならないものではなからうか、否そうしてこそ、綴方科に於ける詩文指導の目的が達せられるのではなからうかと私は思つてゐるのである。小學校では決して俳人、歌人等をなすが目的ではない故に。以下私のとつた詩文の綜合的取扱ひについての實際を述べてみたい。

二、指導の實際

さて之が實際的取扱ひは如何に爲すべきかといふに、私は大體に於て三の方法を考へてゐる。即ち尾括式か、頭括式か、換言すれば歸納か、演繹か、の二法と、最初より最後まで、綜合的で一貫して進む方法との三である。然し第三の方法に従ふことが理論上最も正しいかもしれないが、實際に臨んでは之はなかなか難しい方法で、結局、あぶはちとらずに、どの形式のみこませずに終つてしまいかと思ふので、私は前の二方法、即ち始めに綜合的の扱ひを爲して順次各詩形への展開を爲す方法と、始めに各詩についての扱ひを爲して、後に綜合する方法をとつてみたが、以下この二法について今少し詳細に述べてみたい。い

前者の扱ひは次の如くするのである。

1 各詩の鑑賞

三の詩形をとつた作品(なるべく児童作がよい)の鑑賞に一時であつて、主としてそれがもたらした動機、即ち作者が歌はんとするときの心境を充分味はせる——詩の根本の態度の究明。

2 各詩の理解

次に三詩形のそれぞれの立場、即ち自由詩、短歌、俳句につき、素材となるべきもの、及び之に對する感情の如何なる場合に、如何に表現されるものかを鑑賞させつゝ説明していく。——各詩形の究明。

3 創作

以上二項によつて大體の理解がついたなら、なるべく校外に出して創作の動機をつかまへさせて作詩への心を培はせる。

又後者については、先に三詩形の各々について普通取扱はれてゐるやうな方法を以て、別々に知らせ相當にその深みに入つたところで、綜合的に扱ひを爲していくのである。私は今迄主としてこの方法をとつてきたので、少し前ではあるが、この方法によつて綜合をなした教案があるので次

に記してその説明に代へたいと思ふ。

高等科第一學年級方科指導案

指導者 加藤 正

一、日時 昭和六年九月二十七日第三校時

二、題材 兒童作品(長詩、短歌、俳句)

一、目的 形式を異にせる三種の詩文の鑑賞、批評をなし、各詩は獨特の境地を有することを知らしめ、その創作態度を判然とさせたい。

一、指導過程 (家庭作業)

第一次鑑賞(享樂的)

イ、作品の理解……第二次鑑賞(分析的)

ロ、作品の鑑賞……第三次鑑賞(最高次)

ハ、作品の批評 (主として無價値のもの)

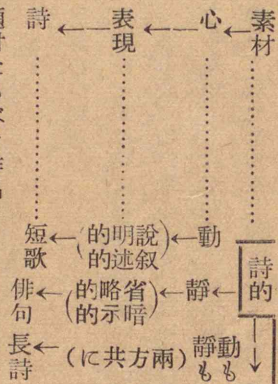
ニ、表現態度の吟味

ホ、各詩の境地の説明

鑑賞 詩文の
價値 認識
批評 各詩形
反省 各詩形
理解 把捉
の進展

一、備考

一、板書要項



二、題材たるべき作品

そよそよとすゝきの上をなびかせて

ふきくる風のはたはたあたるも

栗の實の大きくえんだ姿みて

わかれし友を思ひ出しぬ

窓ぎはにすはりて向ふをながむれば

きりたちこめてまじるにかすむ

栗をとる友の聲をばききつけて

僕はむちゆうでとんでゆきたり

草々の間になける秋の虫

夜道のつれとなりけるかな

大きい小さくゆれる青桐の葉

今ふつた雨はもうやむこの天氣

すう／＼とすゝきの上を渡る風

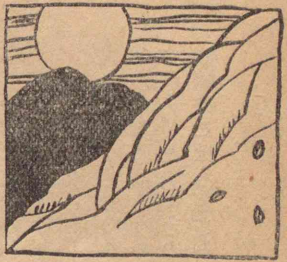
庭隅にこぼろぎさみしくなきにけり

すうと風がふいてくる

三、結語

實際取扱ひについてはもつと詳しく述べなければならぬが、第一の方法は今實際にとりつつあるもの故、その結果がはつきりしてから又述べたいと思ひ一先づ擱筆するが要するに私は小學校に於て詩文を扱ふ目的は、各詩の表現形式を會得せしむべきことにあるものと思つてゐる故、この綜合的取扱ひに一度はおもひをめぐらさなければならぬものと思つてゐるのである。

最後にこの提案に對して諸先輩の御批正を仰ぐことを願ふ次第である。



低學年體操科指導上の 諸問題と教材遊戲化の實際 (其の三)

足柄下・吉濱校 岩 本 岩 次 郎

一身上の都合と、今一つは縣の方から或る一つの研究を囑託されたとの二つの理由で、本誌第二七三號、第二七四號に愚見を述べさせていたゞいたまま、しばらく本誌より離れて居りましたが、今回再び標題に就いて發表させて頂きたいと思ひます。此問題及實際論がいささかなりとも皆様方の實際に御活用願へますならば自分として此上なき幸甚と存じます。

1 自尊心の利用

此の期の兒童は特に自尊心が強いといふ事は前述の通りである故この自尊心を傷けない取扱法を講じなければならぬ。これが爲めには指導に當つて必ず長所から導いて短所を矯正し伸ばして行くことに努めなければ

ならない。人は誰もが自尊心、名譽心を持つものであり、又誰にも長所、短所はあるものである。この爲めにはこれを使用するは容易である。長短は他人に比してのまいふでなく、其の人、其の兒個人について比較的優れた所を長所とし劣るところを短所とする見方もしなければならぬ。今長所から短所を導いて善くする例を云へば

「誰さんの臂の舉げ方は大層よく舉がつてゐます、けれど今少し臂を前に持つて行きますと尙更立派な臂側舉の姿勢となります」といふ如くする時は眞實に自尊心を傷けることなく樂々と矯正することが出来るのである。短所だけを舉げて「誰さんの駄目だ今少し上に」

とか又「今少し下に」とかいふ指導法では兒童は萎縮してしまつて生々發展の氣分を失ふことは甚大である長所より短所を導けの語は、この期の兒童取扱上忘れてならぬ金言であると思ふ。

2 模擬心の利用

模擬が當學年兒童の生活發展の根本をなしてゐる以上これを利用することは又大切である。

「サア先生と同じやうにやつて御覽なさい。誰が一番先生と同じ様に出来るでせう」とか「誰々さんは大層よく出来ます。皆さんあの様にやれますか」と感興的に兒童の心を引き、模擬心を刺戟する時は、彼等は一心に負けない氣で眞似するものである。この時代の要領の指導は總じて眞似によつて授けるので、理窟や理論を以つて授けるのではない故この本能を利用しなければならぬ。

3 想像心の利用

體操の指導に當つて、兒童の想像も又巧みに利用されなければならぬ。飛行機、鳥、兎等は兒童自らが其の位置に立つてよく其の動作を想像し想起して、恰も

自分が兎であり飛行機であるかの如く装ひ運動するものである。一本の線を地上に引いてこれは丸木の一本橋であるから落ちない様に靜かに渡つてお出でなさいと言へば、それを橋と見て渡り、二本の線を引いて小川ですから落ちない様に跳んでお出でなさいと言へばそれが小川になつて一生懸命に跳ぶのである。

4 律動を重んずる

兒童の一進一退はすべて律動的であることは前述の通りである。運動に快感を生起する或る一つの原因は、運動の週期から來る反覆的の刺戟で、唱歌遊戲、行進遊戲等は歌曲及音調の旋律による律動的感覺によつて一層高調せられるのである。單なる手拍子、音聲等もよく律動感覺を刺戟して快感を生ぜしめるのである。このため、運動等に於ても律動的に課することに努めると共に律動的教材を多く取ることに考慮しなければならぬのである。

5 争闘本能の利用

争闘本能が旺んな爲めに競争心強く、且つ自尊心が強い爲めに是を利用することが有効である。同じ運動を

行はする時に「誰が一番よく出来るだらうか」又整頓さす場合に於て「どの列が速く出来るであらうか」等と彼等の競争心を刺激する時は、一心に負けない考へで行ふものである。

6 變化をあらしむる

變化性に富む彼等に對しては、教材の取扱ひに對しても、兒童の取扱ひに對しても、變化を與へなければならぬ。即ち或る教材を取扱ふにも調律を變へて行ふとか、呼唱も教師と交互に行ふとか、速度に變化を與へるとか、又兒童をして一所に永く排列させて止め置かぬとか、方向も時々變へてする等其の取扱法に研究を要するのである。

三、教材取扱ひの一般的注意

正規の指導案として指導する際は、身心の相當發達した人々に對する案である故に、發育のなほ充分でない此學年の指導は餘程迄變化される必要がある。今左にこの期の練習者を指導する際に注意しなければならぬ事項を掲げやう。

1 絶縁的運動は成るだけ課すな。

總じて運動は之を調律的に行へば其の運動が容易であり、疲労も少く、且つ一層愉快を増すものであるからこの時期に於て、調律的な運動を行はせる必要がある。また幼少の時期に於て、彼等に調律的訓練を與へておくことは教育上から見ても極めて緊要な事である。

4 經過の早い運動がよい

概して兒童の調子は、大人の調子よりも速いものであるから、努めて緩徐運動を避け、なるべく速かな動作の運動を課するやうにするがよい。尙また時々活氣を添へるやうな運動を交へる必要がある。それは幼年兒童は特に單調を厭ふものであるから、時々單調を破つて彼等の興味を新たにするやうな種類の運動を必要とするからである。

5 諸種の運動中に即時に服従に馴れさせる様な性質の運動を時々挿入して課すがよい。

例へば、動作中に急に之を中止させて他の動作を命じたり、遊戲を急に止めさせて集合させる様な動作がそれである。斯やうな動作は、早くから彼等に服従の習慣を與へる上に有効である。又總ての運動を遊戲化さ

それは直接運動に参加して努力する部分を、努力しない他の部分から絶縁させ直接之に參與しない部分を比較的静止休息させて置くといふ能力は未だこの年齢の者には充分發達してゐないからである。また運動は、兒童個有の自由運動の自然延長でなければならぬ。それは就學以前の兒童の生活は、殆んど總てが自然運動から成立つてゐるのであるから、環境が變つたにしても、運動形式にあまり急激なる變化を與へてはならないのである。

2 複雑にして困難な運動や、高い程度の調音作用を要求するやうな運動は指導案より除外せねばならぬ。それは前述の如く彼等の神経系統は、まだ充分な精確さをもつて、諸筋と協同して働かせる程度に迄發達してゐないからである。この時代の兒童に對する運動としては、走戲、並に動作遊戲がよい。それは、走戲は活動的で、然かも割合に疲労が少いから、この年齢の兒童によいのである。尙この時期の兒童は模倣性に富んでゐるから動作遊戲に適する。

3 指導案中に屢々調律的運動を挿入するがよい。

せるがよい、それは彼等の神経系統の發育がなほ十分でない關係上、六ヶ敷しい限定と、正確な形とを必要とする體操を行はせるのに適しないからである。運動を遊戲化して行はせるといふことは、この時期の指導の要諦である。(詳細は後述す)而して、正しいフォームを要求する純粹體操への移行は徐々になるを要する

6 確然たる定案を與へることは事實不可能である。

如何なる場合でも案を立てないで指導することの不可能なことは言ふまでもないが、然し此期の兒童に對しては事實に於て確然たる定案を與へることは不可能である。與へればそれはかへつて、兒童の體操でなく、教師の體操となつて無理が入ることになる。然し、容易な運動から出發させて、中程に最も努力的な運動を配し、再び容易な運動で終るといふこの指導案作成の根本原理は勿論、この期の指導に對しても守らねばならないこと、遊戲に於ても、遊戲化された體操に於ても材料の選擇に留意し努めて偏頗な發育を防ぎ、身體を圓滿な發育に導くやうに心掛けねばならぬことは何れの場合に於ても同様である。



異常兒取扱の實例

中郡・大根 宮川利三郎

其の場限りの浅薄なる遠き源を有せざる訓練實施こそ、兒童の心性を迷茶苦茶に破壊し去るものだ。しかも我々は頭からの叱責や一時の激情に驅られた體罰やが、餘りにも効果なきことに驚き悲しむ。

一日に友達を泣かさぬ日はなく、血を見ることを少しも意に介せず、亂暴と殘忍そのものゝ如く、加之授業中に於ける注意散漫、仕事に對する不眞面目、全く心の統制を失つた兒童にして、教師に注意される時は唯其の人の顔を見ているだけで、更に感ぜし様子はなく、教師のあつい涙は冷い笑で受けてゐる。

此の兒童は高一の時に私が受持つたもので、現在は高二になつてゐる。私は今此の兒童に對して、如何なる訓練を施したかを少し述べて見たい。

何とかして此の兒童を救ひたいと思つた。又救へないものかと考へた。しかし此の不良性を帯びた兒童にも何處かに善なるものが、美なるものが潜んでゐはしないか。それを目つけ出さうとした。それは成功の鍵だつた。書方科の成績がどうやら普通兒童の上にあるやうだつた。私は之を極度に賞讃した。そして一時間中口もきかずに習はした。遂に書方の時間だけは一生懸命でそれこそ異様に輝く目付でやるやうになつた。これが第一段階であつた。次には此の書方の時間に於ける眞剣さを、他の學課にもおし及さうとした。然しそれは仲々困難なことであつた。かくして意志力の喚起に努めた。

第二段階は授業以外に於ける勞作による方法であつた。或る時かふいふことがあつた。彼の掃除の受持場所は階段

である。一生懸命でふき上げた。磨き上げた所を、下級生の女の子がバケツの水をこぼしてしまつた。その女の子は怒られると思つて夢中になつてふいた。彼は烈火の如く怒るかと思ひきや、何を感じたか、黙々として唯其處をふいた。私は思はず目がしが熱して來ることを感じた。こゝで又私は涙をこめて賞讃し鼓舞した。そして次の如く言つた『君は今迄よく人を怒つた。今日なども、いつもなら、なぐりつける所だがよく我慢が出來た。君は君の今迄の悪い癖に打克つことが出來たのだ。それは偉いことだ。偉い人といふのは、自分の長い間持つて來た悪い癖を、打ち破りして度重ねる人だ』と、それからといふものは、色々の仕事を無理に彼に言ひつけた。そして彼をして、自尊心と責任感とを除々につけて行かした。

こゝに至つて少くとも彼は、舊い世界から光明の世界へといさゝか脱出し得たことは事實である。けれども彼の心性を淨化する爲には、尙幾多の困難があつた。

第三段階として家庭の教育、狀況等を調査せねばならなくなつた。そして其處には矢張り此の兒童が、斯くなるべき原因のあつたことを發見した。それは彼の長足の性質で

あつた。彼の家は決して貧困ではない。寧ろ相當な暮しと言はねばならない。然るに父の死後は現在三十何歳かになる長兄の手によつて一家は支配されてゐた。兄弟は随分多い。彼は其の六人目の弟であつた。そして私は彼の家を訪ひ長兄と面會した時、次の如く感じた此の人は過去幾年の間、可愛い弟をかうして、ひねくれと叱責とで、悪い方へ悪い方へとたゞき上げて來た。自分は此の兄と闘はねばならぬのだと。

愛情、私は此の少年を決して叱つてはならぬと思つた。叱ることは益々圖々しくするだけだ。唯抱きしめてやるより他はない。それ以來、私は一層やさしい言葉で話しかけ彼の主張も正しい時は、成るべく通してやるやうにした。唯温情を以て接した。これによつて彼の社會觀も、人生觀もいくらか變つて來たやうに思はれた。これが第四段階である。

斯くする事二ケ年。無論幾多の迂餘曲折はあつた。然しどうやらものになつたやうな氣がする。

終りに本年一月十四日に彼が書いた作文をそのまゝ掲載して見よう。

○元日の朝

朝早く起きてから、すぐ若水を汲みに行つた。すると未だ隣りでは起きてゐられなかつた。僕はカラカラとつるべの音も勇ましく汲み初めたら、誰かもう汲みに来たといふ聲がした。——歸らうとした時おばさんが起きて來られた。あたりは一面清新の氣にみちて居た。そして僕は家に歸つて來て、若水で神様のおぜんだの茶碗だのを洗つてから、上に上つて火をもしつけ始めた。もちを焼いた。やつと焼いてしまつて、今度は醬油を出しに行つて來た。いつもやりつけていないので、醬油の入れ加減が分らない。けれども、でたらめにうんと入れたら、からくてからくて、たまらない。そこで水を持つて來て入れたら、つゆが澤山になつてしまつて。煮え立つとこぼれて、どうにも仕様がなない。困つて居る所へ、兄さん（長兄）が起きて來られて、おこられた。

未だ言ふべき事の半分も書けない。又これだけでは、分らぬと思ふ。然し彼を導いて行つた大きな問題を二、三摘出したものである。又これは決して、事新しいものでなく多くの教育者が皆やつて居らるゝ事と思ふ。唯教育は理論

だけではならぬと思つたので、多くの人のやつて居らるゝ事を及び私の貧しき體驗を記した。

尙異常兒に施す教育は同時に又正常兒に對しても、一層充實し一層完全ならしめる爲にも、貢獻するものではないだらうか。と言ふことを一言附け加へて置きたい。

報德會主唱者花田伸之助氏の意見書

我が國家を永遠に救ふべき具體的根本策は一、各官衙、軍隊、學校、會社、銀行、工場、商店等苟くも多人數の集團せる處に於ては、毎月一回教育勸語の捧讀式を舉げ且聖旨の實行につき申合せをなすこと。

二、各家庭に於ても毎月一回前同様の事を營み、若し出來得るならば毎日適宜の時刻に教育勸語を捧讀又に齊誦すること

三、修養又は教化を目的とする會合に於ては必ず先づ教育勸語を捧讀し而る後他の行事に移ること

の三項の實行を衷心より提唱して已まないものである。

世人動もすれば形式を輕んじ、儀式めいた事は極力之を非難する者さへあるが、彼の幸徳一派の大逆事件に連座せる岡本眞一郎なる青年は、幸徳以上の逆心を懷きながら、斷行するの勇氣を出し得なかつたことは、子供の時から親の躰によつて毎日陛下の御影を拜まされたから、どうしても不敬の行動が出来なかつたと悄然として涙を湛へた。かくの如く形式から知らず識らずの間に嗔ひこんでゆく精神の力こそ、實に偉大なるものがあるといふ信念を一層強くしたのであつた……と。

郷土中心

講座

清算取引の本質

S・S 生

前號に於て鞘取引のことを概説したが、鞘取引は時の相違による値鞘を利用する場合のみでなく、場所の相違に依つて生ずる値鞘を利用する場合をも含むのである。

例へば生糸に就いて云ふと横濱と神戸との相場が、限月を同うして非常に値の開きが出来たとき採算的に有利と認めるときは一方の安い地方の糸を買つて高い地方で賣ると利鞘が取れる。これも一種の鞘取方法である。

所が時と場所の何れたるを問はず、鞘取引の行はれる結果は物價の平準作用を齎らすことは自然の理であることを説明して置く。

即ち時と場所の何れかにつき値鞘を生ずるとき、人は必ず其安きを買ひ高きを賣るは必然のことであるから、安い地方安い限月は買手が多くなるため勢ひ値段が昂がり、高い地方、高い限月では賣注文が蒐まる爲め相場の下落は免れ得ないことになる。

だから鞘取引は物價の平準作用を齎らすといふのであるが、反對に物價の平準作用は鞘取引のみに依つて生ずるものと早計してはいけない。交通機關の發達も亦この作用を生ずるものである。

賣買締結方法の種類

次に取引所で行はれてゐる賣買方法に就いて述べたいと思ふ。

取引所に於ける賣買方法は先づ左の四種に分つことが出来る。

- 一、入 札 賣 買
- 一、相 對 賣 買
- 一、糶 糶 賣 買
- 一、競 賣 買

之れである。

一、入 札 賣 買

例へば物を賣らうと云ふ場合、幾何なら買ふと札を入れる場合、之れを買入札と云ふ。此札は高値のものへ落ちるのは説くまでもないことである。

反對に賣入札は買人に對するものであるから買人は安い賣人から買ふのは當然である。換言すれば安値に札が落ちるのである。

二、相 對 賣 買

生糸などの實物取引などに多く用ゐられる方法で一人と一人との相對づくで賣買するものをいふのである。

三、糶 糶 賣 買

一賣手に對して多くの買手が値をせり上げて、その最高値に品が落ちる場合を「セリ」買といひ、多數の賣手が一買手に値をせり下げて最安値が買ひ取られる場合は「セリ」賣といふのである。

四、競 賣 買

相對は一人と一人「セリ」は一人と多數の取引であるが、競賣買は多數と多數、又は一人と多數との取引であつて、所謂清算取引は一般に之れに依つてゐる。

此種に於ては一般清算市場に用ゐてゐるものの外左の三種を數へることが出来る。

(甲) 歩 み 賣 買

これは其性質上、一立會に相場は幾つも出来るもので即ち賣買の出来たものを一々其値段と出来高とを場帳に付けて行く方法である。

(乙) ザ ラ 場

歩み賣買に似たものであるが取引が幾分だら／＼してゐる點に多少の違ひがある。即ち前者は甲と乙との間に百圓で五拾枚、丙と丁との間に九十五圓で百枚商内が出来たとすると各之れを別に記帳するのであるが、後者は甲が百圓で賣らう乙は九十五圓なら買はうと云ひ結局折合つて九十七圓で取引するといふ様な場合を意味する。

(丙) 板 寄 方 法

申合せ方法ともいふもので賣玉の申出、買玉の申出を列記し、賣玉多き時は値を引下げて買玉を誘ひ、買玉が多いときは反對に値を引上げて賣玉を誘ふ様の取引方法である。

× × × × ×

尙取引所取引に就いて舒すべきことは多々存するも一先づ茲に打きり、不審又不明の點は諸彦の問合せにつき答文を惜しまずと筆者云。

世相諷刺詩二題

一

燈

一、隣の子が腕白で困る

しかも親は少しも叱らない

あまり悪戯が嵩じるので

一寸お灸を据えた

懲りると思ひの外

亂暴は募るばかり

石を投げてガラス戸をこわす

追へば押搦つて逃げる

家の子を棒切で打つ

泣かしてお小遣をまき上げる

沙汰の極みだ。

二、俺は堪忍袋の緒をきつた

とうとうひつ捕へて鐵拳を見舞つた

泣聲を聞いて近所の長屋連が

ぞく／＼集まつて來た

子供は一段と泣き聲を張つた

「まあ可哀相に

やれ、大人氣もない」

悪口が俺計りに投げられた

いくら譚を話しても

根がわからずや揃ひだ

かまふことはない

打つて／＼打ちまくつてやれ

子供の性根が直ほるまで

うんとこ、やつつけることだ

一、鳥の仲間と獸の仲間とが

昔噺を其儘に争を續けて居る

鳥の世界から獸の世界へ

獸の勢力から鳥の勢力へ

轉々さながら走馬燈の様だ

二、獸軍を叱咤する獅子吼

鳥軍に采配を振る鷺の羽根

しかし獸と鳥との勢力闘争では

三、草と木が風に任せて啼いた

『鳥や獸の叫びに飽きた

矢張頼もしいのは人間味の世界だ』

『すりや蝙蝠は何處へ行く!』

アハ、／＼ワアハツハ』

短歌

津久井・牧野

小山金之助

○愛兒を亡ひて

湯上りの美しき子とたたへてし亡き子を偲ぶ雛
段の前夢に似て夢に非ざるかなし子の永久の旅出に遇
ふぞ敢果なき只一夜旅に宿りて彌生子と永久の別れとなりた
る因果今こそは永久の別れと同胞がすゝり泣きつゝ送
るかなしも近からぬ山路を幾里かなし子を兄は脊負ふて物
言はずいく返り來ぬ魂に手向けし白梅のかたきつぽみはい
つ笑ふらん朝に夕に乳のたまりて忍び泣く妻のあはれは慰
めも得で奥津城に亡き子とぶろふ一日は疲れも怨も思へ
ざりけり從兄姉等が日毎捧ぐる花水に父や母をも戀ひ慕
ふらん

贈られし人形負ふて幼な子は亡き妹を物語りつゝ

縁なくて暗き彼の世に旅立ちし哀れ彌生子父母
恨むまじ新らしき位碑圍みてはらからが雛の前にて思ひ
出語る遙かなる我故郷を望む毎ふもとに眠る彌生子偲
ぶ

(昭和七・三・三)

短歌

幡の里人

さらば

○ 袖袂かつ悲しき極み縋り泣く教へ子なだめ我も泣き
居り

○ さて壇に立てば塞ぎ來我胸に訣かれの言葉すら／＼
と出ず

○ 送る者送らるゝ者やがて鳴る汽笛に隔つれ愛は渝ら
ず

○ かゝる折慕はるゝものの苦しみをしみて知りぬ訣
かれ行く時

○ 今はしも語らふことの長からば悲しみも増す教へ子
さらば

雑詠

高座・大和校 大上竹彦

△製糸場の休みなりとて學校を訪ひ來る子等を見つ
ゝ樂しも

△教へ子の來るてふ日にオルガンを氣向きにひけば
若葉の薫る

△伸び育つ若き血あふる姿となりし子を見てあれば
口をきゝたし

△何故に我に告げざり青木死すと去年の教へ子にく
しみ覺ゆ

△砂積みし吾は海に入りけり砂の山には波荒るゝ
まゝ

△夕づける頃に歸れば白百合の甘き匂ひのたゞよひ
迎ふ

△晝寝過ぎし重き頭に青空の白き浮雲うつろに見入
る

△どんよりと月の光を浴びて立つえんじゆの葉には
風音もせず

△蒼白き唇の色顔の色目に浮べつゝ醫家に走る夜

俳句

豊岡校

岩田紅一

鐵兜

勇士の遺骨通夜

冴え返る遺骨に待して曉近し
白梅の旭に薫るなり鐵兜

區民葬

哀の曲雲に凍るや兒等と立つ
砂原のいくさごつこや春淺し

水兵を送る

錨卷く東風に晴れたり軍艦旗

雑詠

南毛利校

杉山杜子美

玄關に日あたつて居り足袋をはく

活け花に海の風くる大旦

元日の山を歩いて人に逢ひぬ

玻璃そとや枯蔓のびてゐて夜

葱さげて月さむき河に出逢ひたり

一月一日沼津に旅す

水そこ石見えて冬の魚ほそきかな

富士見えて沼津の濱の春あさき

磯のべや土筆を抜いて富士のまへ

×

われら焚火す林の椿さいて居り

くすり湯や庭竹のみぞれやまざる

田の梅や頭巾かぶりて母の行く

頭上しぎ啼いて舟のかしぎたる

橋の下の草のあをさに冬日あり

風ふいてふいて家裏のうめもどき

芹つみをんな芹こぼし去んぬわが門へ

(三島)

(沼津)

(沼津)

紙上句會

雛祭

雛祭女の客ににきわへり
 雛様を明るき部屋にかざりけり
 雛壇に妹の活花もそへにけり
 世は移り雛にかしづくキュービ哉
 キュービーの服編む姉や雛の前
 寄せ貝も漁家にふさわし雛祭
 雛壇の灯に湯氣立つや飾り膳
 雛壇に人形飾りぬある限り
 古代雛懇ろに出す葛籠かな

一燈選

名倉間山

牧野倉之助

横濱 墨江

間 山

春 雜

泥靴を洗ふ小川や水温む
 春の水笈溢れてこぼれけり
 雪解水舊海道を流れける

春三題

初 午

初午や格子稻荷の燭暗く

日の出

倉之助

墨 江

とほる

一 燈

中山校高一兒童句抄より

ひろく／＼と續く田の面の氷かな 河原 一元

さしき中餅ひろげたり年の暮 岸 仲藏

竹の葉の雪落ちきれず日暮れたり 岸 仲藏

こと／＼と窓打つ風や初時雨 田邊重作

雪の夜や満洲軍の思はるゝ 田邊重作

雪の田に餌をあさり居る雀かな 土志田定治

おゝ寒むと炭火を吹くや野良歸と 土志田定治

炭焼の煙になびく夕かな 田中満之進

初時雨向ふの山のぼんやりと 田中満之進

山茶花に一片の雲流れけり 平本 茂

星飛んで馬の嘶く霜夜かな 平本 茂

井戸端の溜水氷るあした哉 笠原三々男

ざく／＼と踏み行く音や霜柱 笠原三々男

爐 塞

閉ぢし爐に來るも癖なり二三日
 爐を閉ぢて老母は椽に日を追ひぬ
 庭の樹々深む縁に爐を閉ぢぬ
 灰屑を漉して塞ぎぬ大圍爐裏
 爐塞ぎし迹のみ青き疊かな

獨 活

うど畑や夕日に延びる山の影
 堀る獨活を一人束ね居たりけり
 うど堀の影小さくなり正午迫る
 獨活畑の少し埃りぬ午の風
 師の坊の飽かず召さるや芽獨活和へ

山茶花に近く釣瓶を繰りにけり

寺の鐘淋しく鳴りぬ初時雨

残雪や向ふの岡の松の蔭

炭ついで物縫ひつくす母なりし

雪の下物の芽春を待ちにけり

時雨の夜や野路急ぐ行く頼冠り

小草原音なく暮れて時雨れけり

さめくくと小枝をぬらす時雨かな

大根畑日毎に雪の嵩みけり

曉を炭焼く烟の白さかな

冬の海淋しくひびく汽笛かな

冬の花吹く風強く暮れにけり

しん／＼と眠る草家や雪の中

風の中の人の往來や年の市

風の池落葉をつけて氷りけり

大高信太郎

芦垣松平

磯貝豊吉

清田太郎

相原 勇

佐保田廣三

飯田公弘

相原菊治

岡本飛山

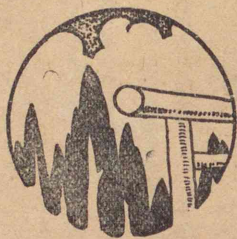
次題小鮎

三光に薄賞を呈す

三 句

締切四月三十日

投稿は雅號にし三光入選の時に名乗り
出でらるゝも差支なし



關 西 詩 行 脚 (續)

津久井・青野原校

小 泉 碎 石

姫路からの夜行は二度目の汽車泊であつたから安排も知れて無聊も少なかつたが驛の名も知らず且つ急行なので明け方宮島に着くまでは汽車中の天地だけで外はさつぱり分らなかつた。宮島に着いて洗面もそこそこに汽船殿島へ詣でた。内海波靜かで乗心地非常によかつた。屋上展望を恣にして上陸し朱の大華表を右に見て徒歩社頭に至り拜觀券を求め廻廊より神前に至つて神符を受け一匝して千疊閣五重塔下より棧橋に出で歸航しつつ晴賢元就の戰場を望み往昔を追懷しつつ上陸して尾の道へ向つた。

五層高閣聳秋空、朱殿玉廊映海中
風致幽勝三景一、航行波上影玲瓏

又

宮島海濱波浪平、汽船一路地天清

白雲紅葉吟心靜、滿目風光適野情
海原の波間に浮ぶ大島居ながめて渡る宮島のうみ。

尾の道に下車し急ぎ多度津への便船を求め再び瀬戸内海に船上の人となつた。航路三時間海濱波低くして船窓氣穩かであつた一島隠れて一島顯はれ一島去れば一島來るといふやうで大小無數の島嶼波上に點在して送迎に違あらずであつた。風景絶佳行路の情を慰め詩料亦十分であつたが、前途の進行に齟齬として吟詠推敲に暇がなかつたので他日筆硯を呵して今日の清興を記さむことを期したのである。船中棋を圍むもの杯を傾くるもの浴を取るもの等千種萬樣園樂亦一家庭の如くであつた。予は友と舷側に眺望を試み遙に多度津へ向つて進んだ。

航行一路極平安、内海風光仔細看
舷上與朋談且笑、銀波如玉白漫漫

又

前方背面碧崔嵬、一島去兮一島來
航路何比車上苦、海風穩處思悠悠

又

展開海路問船師、島嶼看來形態奇
眼界風光詩興足、雨灑紅葉晚秋時

ふな出して三時あまりをわたつみに

送り迎える島のかず／＼。

多度津は殷賑な街である。先づ心に浮んだのは「一太郎ヤイ」の老母の銅像であつた。先頃八十歳の老騷を提げて上京した事や世の同情に依て悲境を轉廻して老後の樂郷を開拓した事など深く考へつつ琴平行

の汽車にのつた。同處の桃陵公園を一見したかつたが斷念して琴平驛に下車した。徒歩櫻の馬場を辿り大門より社頭に進み數百級の石段を上つて先づ旭社に詣て右廻して本社に參拜祈願した。社前讃岐富士の展望主基の記念殿を拜して下山高松へ向つた時は風色蒼然電燈軒頭に輝く頃であつた。

遙望海門多度津、山容水態景光新
公園銅像不朽跡、傳道盡忠愛國人
手をあげて出船を呼べる老の身は雄々し逞し日本魂。

官幣社前賽客多、象頭山上勢嵯峨
古來渴仰尊崇舊、靈德神威挫四魔
金刀比羅の秋の夕に眺むれば讃岐の富士の姿うるはし。

高松驛に下車したのは點燈後はや一時間過ぎてゐた。驛前井戸屋別館に宿つた。翌朝六時を期して途に上るべく寢に就いた華胥夢破れて窓を推せば秋雨濛々轉行路の寥しみを感したが勇氣一番朝の行事を了りて雨中栗林公園を訪ひてその雅趣を賞した實に天下三公園に匹ける幽致といふも敢て過稱ではなからう。電車屋島山を探りけり

ブルによつて登つた。往復共に五分九秒で徒歩二十町餘の山嶺を極めたが、山雨濛々袂を濡して展望の快を行ることが出来なかつたのは殘懷に堪えぬのである。

衝雨早朝到栗林、瀟灑園景莫塵侵
蒼松鬱密多蟠屈、別有紅楓秋色深

又
嚳昔源平古戰場、島山元々水茫茫
如今追憶當年夢、轉覺滄桑歲月長

又
登岳電車往復還、行程半里翠微間
秋寥古戰場中雨、佇立留筇屋島山
宇野行の汽船に乗つた。航路顧みて高松の玉藻城を望み見て會心の笑を堪えつつ前進した。丁度前夜井戸屋に同宿した多度津邊の小學生も同船したので船中誠に賑かで旅路の疲も忘れてしまつた。宇野より汽車岡山で下車して日本三公園の一たる後樂園を探つた。園中最も佳なるは唯心山天守閣延夢亭砂利山鶴鳴館細響軒中の島の釣殿蘇鐵園等である。手入の行届ける木石の雅致ある園境の廣大なる筆舌の盡す能はざる風致で低回する能はざるの感があつた。

園名後樂事何如、世上風塵盡掃除
自適逍遙天地別、箇中常見泥樵漁

京都三條の終驛に下車したが雨頻に降つて歩行の困難を覺えたので自動車雇つて五條の辨慶樓へ投じて最終の旅泊を定めた。浜に浴して路塵を洗ひ京都式の食膳に一壺の杜康を侑め散步洛陽の夜景を見て午後十時寢に就いたのであつた。翌くれば霜月十五日曉起東天を拜して聖壽を祝禱したてまつり且つ一行の平安を念じた。宿雨全く霽れて曙光正に明らかである。朝浴をとつて身を清め朝餉を前面東山の高丘に對し欄下加茂川の清流に臨み右方に五條の長橋を望める高樓に於て餐了し舍費の一切を支辨して自動車を僱ひて早天西京勝地の遊覽を試むべく辨慶樓を辭したのであつた。自動車は加茂川に沿ひて走りつつ友禪染の晒し場を眺め琵琶湖疏水のインクラチンを見初に伏見東陵より桃山御陵の參拜をなして大帝の御聖德を偲み奉り乃木神社に詣て水師營の遺跡乃木將軍の幼時の狀態を知りそれより伏見稻荷宮を拜し三十三間堂に柳の精を語り、大佛殿方廣寺豊國神社耳塚によつて古を温ね新高雄の紅葉を賞し清水寺の

高閣に救世淨聖を禮し圓山公園を探り知恩院を拜觀して名畫を品評し祇園の八坂社より大極殿前に出でて昔を稽へ南禪寺を過りて東山銀閣寺に到りて八方正面の庭園より義政在世の遺物を見帝大を望み又御所を拜して千有餘年皇居の尊嚴を仰ぎ平安神宮北野の天神宮を歴拜して北山金閣寺に到り古器古物後水尾帝御手植の椿行幸の迹を拜觀し二條離宮を仰ぎ而東西本願寺の大伽藍を訪ひて割愛し午後大津に向ふべく電車に乗つたのである。

香烟遶谷妙高樓、閑古佛尊地亦幽
眼下展開紅葉景、感吟清水寺邊秋

又
桃山嶺上仰彌高、丘畔時開積翠濤
稽首陵前無限感、道身直下絕塵囂

又
欲觀銀閣訪東山、境靜白雲紅葉間
要識箇中真消息、喫茶參去古禪關

又
箕都千歲歷春冬、宮闕如今留聖蹤
襟帶山河風景好、更看禁苑綠臺封

又
八坂神威今古鳴、洛陽人士仰靈明
圓山風致祇園景、祠畔尙看一老櫻

又
北山幽致振佳聲、金閣寺閑興最清
柱是南天秋是筇、千秋別有聖蹤名

天津驛に下車し更らに車上石山寺を訪ひて展望した。山上に巨岩屹立殊に妙である。紫式部源氏の間は一入の感を起させたのであつた。山上に立つて矢走の版帆を想像し瀬田の唐橋を望んで三上山を聯想し堅田の方向を見て浮御堂を偲ひ比良山を望んで三井寺を訪ひ、辛崎の老松に夜雨を憶ひ栗津の松原に木曾義仲の迹を弔ひ滋賀の宮址を望んで天津驛に至つて三度び夜行列車にのつた。此行沿道の古跡多きも殊に笠置や伊賀上野等は大に感慨を深くしたのである。琵琶湖八景を探り得たのは倅であつたが金鯱の城を訪ふ能はざりしは物足らぬ感がある
電車一瞬去京都、來訪大津八景湖

矢走歸帆多興趣、閑吟曳杖踏名區

又
堅田浦畔好風光、湖上更添淨御堂
萬感衝心山寺暮、未聞落雁一聲長

又
栗津途上憶晴風、懷古馳車感不堪
八景長傳風致美、琵琶秋水湛如藍

又
曳杖石山第一岑、坐懷才媛轉追尋
庭上長存觀月閣、滿眼秋光紅葉深

又
古松老檜一叢林、三井寺邊暮色深
坐愛梵臺人去後、靈鐘衍谷作龍吟

又
石山遠望瀨田津、波上二橋作主賓
傳說由來弓箭德、藤公努力費精神

又
偃蓋一株千歲松、龍鱗楚々綠臺封
辛崎夜々雨如滴、只見江頭黛色濃

又

比良遠望碧崔嵬、未見六花掠亂開
詩興頻催秋晚景、雲晴嶺上月徘徊

大津發夜行列車は十六日の朝の六時過ぐる頃、東京驛に着いた。乃ち電車新宿に下車した。記得十五日夜行飯途々上第八師團兵士の滿蒙の地に遠征すべく出發せるに逢つた。沿道停車場は見送りの人立鍾の地なきまでに士氣を盛んにして感謝を表してゐたのであつた。

午前九時三越支店に至りて館内を見物し午前十時に新宿より八王子迄一行五名は親しく旅行中の山容水應人心民情を語りつつ終始一貫趣味を共にして視察の旅程を果したのである。八王子に集合して八王子にて解散し惜しき袂を分ちて東西に別れた。一行中の四名は尙車中に在つて追懷に耽つてゐたが、與瀨驛から全く路を異にして各故山へ向つたのである。予は與瀨内郷三ヶ木を経て横濱水道を下に瞰て行程里許の山路を辿つて午後二時半柴門に入り旅程八日にして装を解き身心始めて静息することが出来た。夕景村痒を訪ひて一校職員に販來を

告げ視察一分の責を果すことを得た。首を擧げて大久保山を仰げば唇頰笑つて吾を迎へたやうであつた。

嗚呼這回の旅行は東京神奈川靜岡愛知三重奈良大阪兵庫廣島香川岡山京都滋賀の三府十縣の地を跋涉して、名勝古跡を尋ねて古今の變遷を考へ人情風俗を察して教育文化の傾向を究め以て東西人心の差違を比較して大に見聞の巨益を得たのである。脚力を費くるものには汽車電車自動車汽船ケーブルカーエレベーターあれば到處之を利用して便益を得夜行三泊旅舎四泊の旅程を踏んで大なる體驗を経たのである。そして大阪に於ける公園開設祝賀會明石や姫路の菊花大會淡川に於ける楠公デー高松に於ける演習舉行は旅行中の一大餘興であつたのである。只怪むべきは岡山發の列車が洛陽京都に進行中某驛に於て一青年の飛込自殺せるを見たことである。何んといふ社會相であらふ誰も誰も生き延びんと欲する人の世を惜し氣もなく打ち捨つる青年の心理實に現下社會の大問題ではあるまいか噫。

鐵車晝暗雨蕭條、欲向洛陽路轉遙
逆旅忽驚山驛夕、至心誦梵慰亡靈
昭和六年十一月二十三日新嘗祭の吉辰雨頻りなる夜の窓津久井の山村青野原に於て筆を把りて後に供ふるまでである。

跋涉海瀾又岳層、探來古跡與名勝
教科視察參風俗、三府十縣羈旅朋

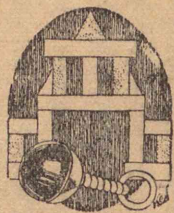
關越えて須磨や舞子と明石浦
古き迹は尋ねけるか那。

西の空ながめて遠く都まで
訪れ見んと初旅の秋。

旅衣ぬぐひまもなく昨日今日
親しき友と杖をひき繼。

行く雪も流るる水も一入に
秋の光のあはれむをぞ知る。

以上



教育援助を看板とする インチキ有志を懲らせ

凡そ近來の特産物とみるべき或種の地方有志輩こそ世に害毒を流しつゝある者はない。彼等を資産階級かとすれば餘りに貧しく、知識階級かとすれば馬鹿げて愚かにすぎ、労働階級かとすれば心驕れり。彼等は所謂インチキ階級に屬するプロ、ブルの混血兒であるが、その特色とする所は頗る自尊心が發達して己惚れが強く、妬心滿々己に勝る者は排外これ事とし、常に陰險にして利己的の策謀を逞しうし、政黨政治に走狗の役割を演ずるを以つて無上の誇りと心得、延いては學校の後援會、青年團などの役員に祭り上げられては、宛然議員になりすまし、學校監督者でもある如き面構して漫に教育問題に差出口をし遂には神聖なる教育者を侮蔑し、時に教員の排斥運動などを企て、憚らざる眞に不埒千萬の曲者である元來彼等は、金も、知慧も、徳も持ち合せない俗物ではあるが、彼等の唯一の戰術として、支那式の逆宣傳を利用して巧に大衆を煽動し、學校、校長及教員などに迷惑をかけることを屢々繰回すのである。

これ等はチンドン式の滑稽劇にすぎないから、稍々知恵心あるものには假面を剥きとられて馬脚をあらはし、醜名を自ら天下に曝し衆人の擯斥をうけるが關の山であるは云ふ迄もない。

それとても人類愛を標徴とする教育者なればこそ、常に彼等を寛大にあしらひ、溫顔和貌を以て應對につとめ、時には外交辭令のふるまひこそするのであるが、飽くまで愚劣にして身の程を知らぬ彼等は、無智無産を有識有産より名譽なり

と心得違ひし、横車を押しとほして有産階級を排斥し、有識階級を排撃して威張らうとするのである。

これらの亡者連が、學區の有志、有力者の名を冒して擡頭し來りつゝあるは時代思潮影響の生産であつて、教育上社會矯風上、甚だ痛嘆すべき限りである。

昔は有志、有力者と謂へば、概ね土地の門閥家とか富有者とか、名望家とか、有識者とかの類であつたが、それらは漸次、影をひそめて、之に更なるにインチキ階級の彌次黨をもつて侵略されつゝある。

されば隨所の學校にこれがための悩みを感じるのであるか、吾等教育の畑にかくの如き、荒熊の跳梁するは時勢の流行とは言へ、吾等たる者は何等か是が防遏策を講ぜざるを得ないであらう。次に掲ぐる津久井郡某校事件の如きは遇と彼等の毒手の表面化された一部分であつて全くこの不良有志の犠牲となりたるもので、眞に氣の毒な次第である。

人格高く意氣軒昂、純真廉潔の教育者ほど、かゝることに憤慨す、吾等は之を當然とみる、須らく教育社會は此種の醜類に彈壓を加へて然るべきである。

爰に寄書の全文を掲げ、敢て世論に質し雪冤の辨となす。

謹啓小生事全く意想外の事件にて三月二十三日以降數日に亘り主として朝日新聞神奈川版への登載により一躍暴校長として醜名を縣下に傳へられ候其後報知貿易等により漸次其真相に近き事項發表さるに至り候へ共世間への第一印象は容易に抜くべくもあらず小生としては實に遺憾千萬に候些々たる事件も教育に無理解な然かも敵本主義に徹底する人達が自己の非を掩はんが爲色眼鏡を以て曲解し卑劣なる策謀宣傳に没頭するときは最も信用し得る

大新聞にさへ次から次へと虚を傳へらるるに至り遂には小生如き凡人をして一層の愚人振りを世に示すことと相成候
近時都市といはず農村といはず經濟界の不況は刻一刻と其深さを増し殊に農村中當地の如き養蠶地帯に於ては一層甚だしく稼ぐに職なき農民の苦境は引いて個人主義の跋扈となり義務觀念の低下となり經濟關係に因をなす種々なる尖鋭的葛藤は教育上にも塞心すべき悪影響を齎らしつつあるはまことに困まりものにて候

者に對しては忌憚なく啓蒙すべき必要之あることと存候 教育擁護の爲正義の主張の爲敢爲立つて精一ぱいの力を盡すこそ眞の教育的態度と思はれ候 教員互助の眞の精神も此に存すべく郡、縣の教育會員乃至全國教育會員互に力を合せて先教員地位の擁護教育の權威を先教育者自身の合力によつて一般に示すべき時期の到來しつゝあるを感ずる次第に候不肖不徳の到すところとはいへ惡名を縣下に傳へらしも知る人ぞ知る不撓不屈驚馬に鞭し餘義なき修養運命的體驗と心得て一層獎勵の覺悟に候何卒倍舊の御指導賜はり度候
敬具

昭和七年四月五日

津久井郡尋常高等小學校長 ○○○○

縣教育會主事吉田消太郎殿

然して理知を缺き德義を考へぬ偏見なる没分曉漢も往々之あり我々教育者を町村の雇傭人扱視して師弟間の情誼も國民教育の本質も目茶苦茶に蹂躪さること少なからず、實に教育擁護の爲にも默視する能はざる現狀に之あり候 勿論郷に從ふことの教育の實際上一手段として大切なことは申す迄も之なく候へ共單に此に止まらず進んで郷を指導し行くことが眞の郷土の教育であり教育者のとるべき態度かと存候 然し何所も同様に其土地には土地の傳統的弊習あり滔々として押寄する時勢の潮流あり我々をしてなか／＼に思ふ通にならしめず候 小生今回の事件とても單に教育問題のみ切り離し得ず頗る複雑なる社會的デレンマ渦中の犠牲位置にあるの止むを得ざりしは事實にて候 二三策謀家の惡宣傳とはいへ一時は隨分に火の手をあげ噂の中心を作りしも次第に化の皮現はれ殊に大部分の理解ある有志青年團等の人々は小生の立場擁護に奔走して聲明書の發表配布等をなし町會に於ては校長擁護の意志表示をなす等漸くにして世間的にも冤罪を免れ候 邪は正に遂には及ばぬものとはいひながら精神的大打撃を受けし點一の災難と諦むるより外之なく候 今更ながら新聞記事の鵜呑みに出來ぬことと弱き者よ汝は教育者なりとの感を深く致候

小生は常に學校經營の一信條として社會的感情融和の必要なことを主唱致居候へ共あまりに無鐵砲おる馬鹿者に對しては斷じて許すべきものに非ずと考へ居り候 吾々は職分を忘れぬ範圍内に於ては遠慮なく大同團結すべく教育の殿堂に迫害を加ふる無禮



彙報

郷土教育研究發表大會狀況

鎌倉郡正修小學校主催

當校では昭和二年頃から郷土教育の研究に志してゐましたが近年急に其の聲が高まり、高まるにつれて郷土教育の概念益々混亂するといふ有様、それでどうしても郷土教育の効果は其の體系を樹立せなければならぬといふ必要に迫られ、その組織を造つたのであります、所が光榮にも縣の御推薦により廣島に参り、其の體系を發表いたした所、非常なる賛成を得ましたので茲に自信を得、愈二月廿五日午前九時から研究發表會を開いたのであります。しかし各學校では時恰も學年末でもあり、又方々の學校では豫算編成の時でもあり、更に出征兵士の見送りやらで非常に多忙の様

爲め、參觀者は極めて少ないだらうと豫想をしておりました。何にしてもいくら研究發表會を開いても參觀する人が來て呉れなければ張り合もなく、其の波及する効果も薄いわけでありました。そこで當校としても百名の參觀者があれば大成功と思ひ、印刷物も百五十部造り、残りは教生が三月七日に参るから、それに利用しようとしたのであります。所が授業の始まらぬ前に全部研究物は賣れ切れてしまひ、更に餘分に印刷しておきました指導案も忽なくなり、後から後からと來る參觀者には一枚の紙さへないといふ有様、中にはこの雪の中を遠く、僻陬の地から來た故何でもよ

いから呉れといふ。仕方がないから反古同然の紙を玄關の机上に置いたら熱狂の參觀者は一物も残さず持つて行つてしまひました。

又中には學校一部づゝに分けて呉れといふ。そこで參觀者諸氏に相談したら、既得權我にありといふ工合でいつかな承知して呉れません。それで當校では重々お詫びして僅か郷土教員體系一枚で我慢を願ふことに致しました。

さて第一時は各學級各教科についての郷土化をやつたのでした。大凡教科を郷土化する場合には四つあります。一教科理解の基礎として郷土をもつてくる場合。二教科の徹底を期する場合に郷土に歸結して見る場合。

三教科教材の意義を一層明かにする爲に郷土と比較して進む場合。四教科教材の一層充實の爲に郷土教科を補充する場合であります。杉崎訓導の修身の郷土化、菊地訓導の綴方の郷土化は一の場合であります。廣村訓導の算術、靈山訓導の算術、伊藤訓導の歴史は二の場合です。林訓導の讀方は三の場合です。鹿島教員の讀方は四の場合です。それから府川訓導の圖畫、伊勢田訓導の手工は、技能教科の郷土的進出をはかつたのであります。

第二時は郷土それ自身の認識を目的としたものでした。

本校には本校獨得の體系がありますが今こゝで述べて居られませんから、授業そのもののねらひ所を一言述べて置きます。低學年、中學年、高學年の三段の授業をいたしたのです。それは郷土科の體系を實際に知つて貰ふ爲めに頗る必要と思つたからでした。今形式的に郷土に對する研究の態度を述べますと、低學年は郷土に對する親しみ、中學年は郷土認識に對する目を開いてやる。高學年は多少科學的に研究する態度を養成したいと思つてゐる。實質的に郷土に對する研究内容を述べますと、低學年は自然連續の把握中學年は歴史連續の把握、高學年は生活連續の把握となります。それ等の詳はしいことは申し述べる餘裕が御座いませんから又の機會にゆづらせていただきます、この立場から郷土科の授業をいたしました。河野訓導のは庚申様の猿をやつて傳統的郷土に對する懐しみを味はせ、大神訓導の七里ヶ濱は自然を中心とした歴史、生活の連續關係をつかませ様としたのです。大矢訓導の腰越通りは腰越通りに存する事實的認識から其の背後の腰越通りの郷土に於ける大きな役割を把握させようとしたのであります。最後の一之瀬

訓導のは江之島を地理學的立場より認識させようとしたのです。

どの教室もどの教室も立錫の餘地はなく、見ることに出来ない參觀者は仕方なく郷土室の研究物に目を通してゐる様でした。

この頃から雪が益々降つて第三時の協同運動が出来るかどうかを大變心配いたしました。が由來腰越の子供は寒さには強い。もう外では素足で飛び廻つてゐる。この機をはずしては見えて貰ふ時がない。よしやらう。全職員は更に一段の緊張をいたしました。心配した兒童も豫想外元氣で舞ひ狂ふ雪の中で、「太平洋の荒波も、碎けて返る小動の……」と諸聲上げた時はからずもホロリとさせられました。

この運動は全校がうつて一丸となり、幼きも若きも、女も男も渾然融合の境地の下に行ひ一週間の勞苦を忘れて、あゝ面白かつた、愉快だつたと我が家へいそ／＼歸りしめたいといふ大きな望みの中に生まれたものでした。案外生徒が喜ぶのでうれしく思ひます。しかし雪は益々降りつゞいてこの上續けることは出来ませんので中止いたしましたことは残念でした。只參觀者の中外套も着ず、初めから終り

まで凝視して居られる人がありましたが敬虔の念に打たれました。

午後は一時頃から研究発表をいたしました。模造紙十枚つないで體系表を掲げた時はちと大袈裟だと思ひました。先づ岩澤訓導の協同運動について、嘉山校長の本校郷土教育の概念、大矢訓導の郷土教育の體系と其の實際、一之瀬訓導の郷土地理について、更に報告として嘉山校長の全國郷土教育状況と其の批判といふことについて發表いたしました。約二時間ばかりかかりました。窓外の雪は益々降りつゞき分、寸、尺にもなりそうです。おまけに風さへ加はつて大吹雪になりましたが誰一人歸る者はなく熱心に傾聴して下さつた事は實に感謝の至りであります。それから赤星先生の腰越の古代といふ題で、考古學の立場より實査の結果を發表されたことは我々に非常なよい參考となりました。教育學の權威者豐澤先生から郷土教育の概念と其の批判と題して約一時間ばかり、該博な智識と的確な批判とを下されたことは我々實際家の大なる反省となりました。講演の終つた時分は、あたりは薄暗くなりまして電燈のない講堂は人目も分らない程でしたが歸る人はそれでも

少なかつたのです。最後に教務課長殿の壯重なる總評が御座いました。

自分はこのプログラムに總評とあるが總評をしに來たのではなく、的確なる概念を把みに來たのであると言つて皆をどつと笑はせられた。それから本校は郡代表の學校ばかりでなく縣代表の學校であるかも知れぬと言つて我々及び町村有力者に大きな刺激を與へられました。それから約廿分ばかり郷土教育實施上に大きな問題を投げ與へられました。その問題は郷土教育上頗る大切なもので課長殿の洞察眼の鋭い事には皆の者舌を卷きました。

最後に聲を高くして、郷土教育は教育上非常に必要であるから全縣下にその熱が高まる様にありたいものだと言つて降壇された時は正に五時半、それから龜ヶ谷視學先生に御講評を仰ぐわけであつたが、夕闇は窓外寸尺に迫り寒氣益々加はりましたので遠慮されたことは残念であつた。聞けば先生は其の方面に對する研究も深く、この際一言所感を述べる用意があつたと聞したが、それが出来なくて頗る残念でありました。

斯くして校長の閉會の辭があつて散會した。さてこの様

にして研究會は終りましたが豫想外の盛會に終つたと皆様に感謝するのであります。遠くは島根、近くは埼玉、静岡（沼津市から十二名來る筈でしたが雪の爲め中止）の諸縣から來り合して約三百名、教務課長さん、視學さん、兩師範附屬主事先生、縣下小學教育の總元締と目される方の御臨席を得ましたことは本校一代の光榮であります。斯く盛大であつたのは勿論郷土教育が萬天下の環視の中心になつてゐる爲には相違がありませんが、取りわけ教務課長さん、視學さん、兩師範附屬主事先生、鎌倉郡教育會の絶大なる御後援の結果であると衷心感謝し堪えないのであります。吾が校は更に郷土教育の旗色を鮮明にしたのであります。行く先きはいつ着くことか分りませぬが、歩一歩力強い歩みを續けて行き度いと存じます。

最後に終日熱心に御參觀下さいました方々に厚く御禮を申し述べます。

殊に激勵の御手紙をいただいた。

女子師範松浦主事先生、島村先生、下野谷柳堀先生、成瀬校の日鳥先生、共進校長谷川先生、平塚第一の比企先生、大正校山田先生、津久井の中野校井上先生、豊岡校岩田先

生、戸塚校、森久保先生、島根縣の福島先生、松村岡本先生に御禮を申し述べます。

社團法人神奈川縣教員

互助會帳尻

資 産 之 部

(三月三十一日現在)

債 券	五八、五〇〇、〇〇
株 券	六、三九一、〇〇
附 金	五、一三〇、三〇
定期預金	九、二七八、二八
特別當座預金	一、五八七、一六
振替預金	二、九五八、九五
現金	三二七、一七
計	八四、一七二、八六
四月以降會費收入	二、〇二〇、九〇
同 利子收入	四、一四、三七
同 退會金支拂	五、五一〇、二〇
四月以降弔慰金支拂	二、〇五〇、〇〇
同 慰籍料支拂	三〇、〇〇
同 支拂濟事務	二、〇〇五、〇三

〇七年度夏季學習帖調查

本會は七年度夏季學習帖編纂調査を、左記委員をあげて三月九日午前、鎌倉師範附屬小學校にて開催した。當日は前年度學習帖の不良なる點を各方面から攻究し、左記の如き申合せの結果をえて開散した。

- 一、紙質を善くすること
 - 一、神奈川縣といふ郷土的特徴をおはしめること
 - 一、都鄙を區別せず一種とすること
 - 一、定價は時節柄特に低廉を主とするも、紙數増加の時
 - 一、三、四年用を一錢程度増額するも可なること
- 以上の趣意を帶し、鎌倉師範附屬訓導各位が内容についても一層改善を施し最善の學習帖を編纂すべく、大馬力をかけて五月末頃までに脱稿を期する豫定である。

横濱市	金子 馨君	同	西川 豊吉君
鎌倉町	池上 敏郎君	愛甲 郡	山下善太郎君
中 郡	茂田 登君	足柄上郡	府川 憲治君
津久井郡	田野倉俊男君	都 筑 郡	白井 隆資君
女師附屬	江端 嘉郎君	三 浦 郡	福田縫太郎君
橋 樹 郡	中島 景雄君	川 崎 市	高島 松柏君
高座 郡	安西 義一君	久良岐郡	小泉 金助君
足柄下郡	久地 春光君	横須賀市	鈴木 信義君
師範附屬	坂倉哲太郎君		

陸軍省軍事課長 陸軍大佐 永田 鐵 山 著

菊判金四十錢 送料四錢
見本用は切手代用(一割増)

最も權威ある
軍事教科書

新軍事講本

最新刊

文部省

財團法人

社會教育會編

菊判 全十五冊定價均一
各金四十五錢送料各六錢
二 選擇自由

高等青年講座

總目次呈

(目 科)
修養、公民、法
國文學、美術、
西洋史、地理、
數學、物理、化
學、博物、農業通
論、工業、商業

滿洲國東北行政委員會決定

新聞部刊模 紙
詳密銅版四角刷

金三十錢

送料二部迄金二錢

(附)國旗並に

長春・奉天・吉林
チ、ハル・ハルビン

市街地圖入

最大滿洲國全圖

新刊

見本用
切手代用
一割増

青年教育普及會發行

東京市神田區・教育會館內 振替 東京一七二七番

東京 大東堂
東京 隆平堂
北 隆平堂
大 隆平堂
大阪 柳屋
名古屋 川瀬
久留米 菊竹

横濱
八景
圖

不
放
名

昭和七年四月十六日印刷
昭和七年四月十八日發行

編輯
印刷人

横濱市鶴見區東寺尾町三六
横濱市中區住吉町五八
吉田清太郎
鈴木清五

印刷
發行所

横濱市中區住吉町五八
横濱市中區日本大通
横濱活版會
神奈川縣教育會

